



Title	ロシア農奴解放期における日曜学校運動と初等教育政策(1859年～1862年)
Author(s)	塚本, 智宏
Citation	北海道大學教育學部紀要, 39, 1-37
Issue Date	1981-09
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/29244">http://hdl.handle.net/2115/29244</a>
Type	bulletin (article)
File Information	39_P1-37.pdf



[Instructions for use](#)

# ロシア農奴解放期における日曜学校運動と 初等教育政策 (1859年～1862年)

塚本智宏

Движение Воскресных школ и политики начального образования  
в период крестьянской реформы в России (с 1859～1862 г.г.)

Тихиро Цукамото

## 目次

はじめに .....	1
第1章 日曜学校運動の発生と展開 .....	3
第1節 運動の発生 .....	3
第2節 運動の展開 .....	9
第2章 日曜学校をめぐる政策の展開 .....	22
第1節 政策の展開と運動の変質 .....	22
第2節 日曜学校の閉鎖 .....	30
結びにかえて .....	35

## はじめに

ロシア史における1860年代は、ロシア社会が農奴制社会から資本主義社会へと転換していく過程での重要なエポックであったことはいうまでもない。1850年代前半のクリミア戦争における敗北は、それまでの「ヨーロッパの憲兵」として君臨して来た地位を著しく失墜せしめた。と同時に、この戦争でロシアは西欧先進資本主義諸国に対する恐るべき後進性を暴露された。この国の経済、政治、文化は、農奴制に深く根をおろしていた。ロシアにとって近代化へ向けての根本的改造はもはや避けることのできない課題となっていた。1850年代後半から準備されるこの国の様々な分野での諸改革は、それを課題としていた。ここで、唯一のそして決定的な問題は、ロシア社会の改造を「上から」行うか、「下から」行うかであった。

本論文が対象とする初等教育改革も、それ自体として、同様の問題を含んでいた。初等教育改革の準備は、1850年代の後半から、教育省の手によって「上から」進められようとして来た<sup>1)</sup>。ところが、教育省の中等、初等教育改革の第1次法案<sup>2)</sup>が公表される1860年には、1859年末に芽ばえて来た「下から」の啓蒙運動が急速に進展するのである。これが日曜学校運動<sup>3)</sup>である。予期しなかったこの啓蒙運動に対する政府の対応策は複雑なものであった。すなわち、しばらくの間これを一定程度、許容した後に、この学校を独自に制度化し、そして、1862年6月に全国に拡ったこの学校をすべて閉鎖し、最後に、1864年初等国民学校規程に初等国民学校のひとつとして再び制度化するのである。やがて、1884年には、この学校を、教育省の管轄から宗務院の管轄に移管し、教会付属学校のひとつとして再編するのである。このように政府側対応策が二転三転を余儀なくされる日曜学校(運動)とはいったい何であったのか。

ところで、1864年規程の成立に至る過程は、同時に、他の重要な諸改革が進行する過程で

あり、なかでも最も重要な改革は、1861年2月に始まる農民改革(「農奴解放」)であったことはいうまでもない。これと初等教育改革が密接な関連をもった<sup>4)</sup>ことは当然ながら、さらに、この農民改革の不徹底性に対する農民の蜂起、さらには革命的民主主義派の革命運動が1861年後半以降、1850—60年代における顕著な高揚を見、そのうえに1863年のポーランドの大「反乱」、及び、ポーランドに隣接するロシア南西部諸県への波及など、専制上層はまさに危機的な状況にあり、このような政治社会情勢が直接、間接に初等教育改革に大きな影響をもたらしていたのである<sup>5)</sup>。教育省は、1865年に、学制改革の事業を総括した報告書のなかで、学制改革の中樞機関である学術委員会の1862年から1864年までの3年間の会議開催数を以下のように掲げている。

「(イ)当面する事業の検討 .....	80回
(ロ)大学令作成 .....	21回
(ハ)ギムナジア・プロギムナジア令作成 .....	11回
(ニ)初等国民学校規程作成 .....	8回 <sup>6)</sup>

このような簡単な数字からわかる通り、教育省は、「当面する」対策に、絶えず追われていたのである。

日曜学校に関する政策は、この「当面する」諸事業のうちのひとつではあった。が、先に述べたような政治社会情勢がこの日曜学校運動に直接反映し、専制上層において少なからず農奴解放にも匹敵する政策課題として認識されるほどの重要性をもっていた。

本論文では、この日曜学校運動の歴史的意義とこれが1864年改革にもたらした影響を考察することを課題としている。

以下に、この運動の発生における諸階層の位置、展開において運動が志向した内容、さらに、この運動の高揚に対する政府の対応、特に、政府内における矛盾とそこにおける教育省の位置を中心に、検討する。

#### 注

- 1) 1864年の初等国民学校規程が成立するまでに、教育省は、作成した1860年法案と1862年法案を、これらへの見解を集めるために教育雑誌や新聞上に公表し、「世論」はこれを中心に、自由主義派、民主主義派等も、それぞれの立場からの教育論を展開した。が、これは、1864年の規程の内容に直接影響を与えることはなかった(В. З. Смирнов, Реформа начальной и средней школы в 60-х годах XIX в., М., 1954, стр. 149)。
- 2) “Проект устава низших и средних училищ, состоящих в ведомстве Министерства народного просвещения。”この法案は、『教育省雑誌』(1860年3月号)や『モスクワ報知』1860年(7月16日付)などに掲載されている。
- 3) この運動は、1860年代ロシアのいわゆる社会・教育運動のひとつとして扱われているものである。すなわち、この時期には、教育は、社会問題の一つとして『世論』の前に現われ、教育諸雑誌の刊行が相次ぎ、一般の社会・政治雑誌や新聞までもが、教育、啓蒙をめぐる諸問題の議論の場となった。さらに、後にはゼムスヴォの進歩派とともに啓蒙事業を活発化していく、経済団体付属の「読み書き委員会」などの啓蒙諸団体が、いくつかの都市に結成されている。しかし、社会・教育運動のこれらの構成要素とともに、教育の普及、啓蒙の現実的な形態としては、この日曜学校の普及運動が、最も重要な部分を成していた。この日曜学校の普及、そして、そこでの啓蒙が、特に運動として性格を有している根拠は、後にみるとおり、これが、その発生と展開における主要なイニシアティブの組織的性格と各学校の目的や方向の内的な連関性を多分に有しているという点に認められる。
- 4) 初等教育改革と社会の根本的改革の問題との関連性、つまり、農奴を農民(「農民所有者」)として解放する際に伴う教育改革の必然性についても、検討すべき重要な対象である。例えば、初等教育制度改革には、解放期以前のロシアに存在した教育省以外の諸省庁のもの、特に村落部の初等教育機関の改革も当然考慮され

なければならず、1862年には、これらの省庁間での独自の初等教育改革法案が作成された他、1861年には、これらの諸省庁のうちでも、最も充実した初等教育機関を村落部に有していた国有財産省も、独自に初等教育法案を作成していた。以上のような農民教育の改革についての検討は、他の機会に譲りたい。

- 5) ロシア南西部ヘポーランド革命とカトリック教が影響し始めた頃、政府は、これを必死に阻止しようと手を尽くすが、その目的のもとに、この地方に、1863年にすでに特別の初等学校規則をつくり、学校の普及につとめるといふありさまであった。
- 6) Обзор деятельности министерства народного просвещения и подведомственных ему учреждений в 1862, 1863 и 1864 гг. (СПб., 1865), Приложение, стр. 24.

## 第1章 日曜学校運動の発生と展開

—キーエフ、サンクトペテルブルグ、モスクワを中心として—

### 第1節 日曜学校運動の発生

日曜学校という名称の学校は、1859年に、以下の表に示すとおり、ロシアのいくつかの都市に、互いに他とは何の連絡もなしに様々な形で発生して来ている。ただ、これらの学校が、平日に教育を受ける機会をもたない職人や労働者に、日曜日の数時間を利用して、読み書きや宗教教育を与えようとしたという点においてのみ一致していた。

日曜学校の「発生」状況（1859年）<sup>1)</sup>

設立年月日	学校名(所在地)	設立(創始)者
1859年3月1日	ヌイトヴィンスク工場学校(ベルミ県)	同工場の司祭
1859年4月	女子日曜学校(サンクトペテルブルグ)	文官シピリエフスキー, М. С.
1859年9月	日曜学校(エカテリノースラフ)	郡学校教官パンチェンコ
1859年10月11日	日曜学校(キーエフ)	} キーエフ大学教授パーヴロフ, П. В. } とキーエフ大学学生
1859年10月25日	新設日曜学校(キーエフ)	

しかし、日曜学校が全国に広がっていくための運動の組織基盤をどのような階層が担ったか、つまり、これが運動という性格をもち得るようになったその根源はどこに求められ得るのか、さらに、この運動があるひとつの目標をもって後に発生して来る学校に多大な影響を与えたのはどの学校であったのかという点で日曜学校の発生を把握する必要がある。この点からすれば、その発生源は、キーエフ大学の学生と同大学教授パーヴロフ (Павлов, П. В., 1823～1895)<sup>2)</sup> によって開設されたキーエフの日曜学校であった。

このキーエフの日曜学校の開設には、キーエフ学区総監ピロゴーフ (Пирогов, Н. И. 1810～1881) が認可を下し、のみならず、彼自身、この学校の普及に努め、自ら講師として教育にあたるほど積極的な活動を展開した<sup>3)</sup>。彼は、すでに、進歩的な(自由主義的な)教育学者として<sup>4)</sup>の評判を得ていた。一方、パーヴロフは、改革期の自由主義グループの生みの親であるところの西欧主義者グラノーフスキー (Грановский, Т. Н., 1813～1855) の影響下に一時あったが<sup>5)</sup>、次第にこの自由主義派と決別する方向にあった。とはいえ、彼は、進歩的な学生層から、「キーエフ大学のグラノーフスキー」と呼ばれるような世評を有していた<sup>6)</sup>。この両者が、キーエフ大学の学生達に要望される形でキーエフの日曜学校が生まれたのである。キーエフの日曜学校は、後に発生する各地方の模範的タイプとなるが、それはこの両者の影響によるところが少なくない。例えばピロゴーフは、後に述べるように、モスクワの学校設立の際にこれを

援助し、パーヴロフは、サンクトペテルブルグでの日曜学校の組織化において特に主導的な役割も演ずるのである。

ただ、両者の間には本質的な差異があった。それは、ピロゴーフからパーヴロフを区別する重要な事実である。これは、1862年にパーヴロフが官憲に逮捕された際に明らかとはなった事実であるが、彼は、1858年にロンドンに渡り、ここに亡命していたゲルツェンと接触していたこと<sup>7)</sup>、これが第一である。さらに、彼がサンクトペテルブルグへと発つ直前、1859年の12月14日、キーエフ大学の学生達によって催されたパーティーで、次のような祝盃の辞をもってあいさつの結びとしたこと。「ロシアの進歩的な運動の先頭に立つ者の健康のために！」<sup>8)</sup>。この日はいうまでもなく、デカプリストの「反乱」発生後ちょうど34年目を迎えた日であった。彼のこのような傾向は1862年の3月まで政府によって暴かれずにあった<sup>9)</sup>。

一方、キーエフ大学の学生は、ハリコフ大学の学生とともに、1858年のハリコフ大学の紛争を契機に、秘密結社に合流し、人民の政治的啓蒙を最終的な目標とする日曜学校設立普及の要求を内に持っていた<sup>10)</sup>。1859年10月にキーエフの日曜学校設立が実現した後、キーエフ大学の学生達は、ハリコフ大学の学生と、また、サンクトペテルブルグやモスクワでの開設を計画するための交渉をこれらの地域の学生との間で行い、組織的普及の事業を開始した<sup>11)</sup>。しかし、翌年2月、これらのうちの先頭にあった学生の数名が官憲に捕えられ<sup>12)</sup>、その後の活動の発展を阻害されることとなった。しかし、この段階では、日曜学校が何らかの形で、革命運動との関わりを有するものと政府には考えられておらず、日曜学校そのものに対しての何の措置もとられなかった。

以上のように、キーエフでの日曜学校発生においては、少なからず革命運動に接触する部分とそのイニシアティブを握っていたが、どちらかといえば、自由主義的な傾向が許容される方向において、日曜学校が発生して来たのである。

さて、モスクワに目を転じよう。ここでの設立のイニシアティブは、モスクワ大学の学生とモスクワ大学教授ティハヌラーボフ(Тихонравов, Н. С.)であり、キーエフの発生のある方に酷似している。ただ、異なるのは、モスクワでの日曜学校設立は、1860年6月になってようやく実現するというところである。ここでは、1859年に学生の間での日曜学校設立のための特別の学生団体がつくられており<sup>13)</sup>、ティハヌラーボフによれば、1859年の11月つまりキーエフでの設立直後に、モスクワ市当局と学区総監のもとに、彼らによって、モスクワでの日曜学校設立に関する申請書が提出されていた<sup>14)</sup>。キーエフではピロゴーフ学区総監がキーエフ県総督の同意も得ずに強行に開設の請願を受け入れ教育大臣の不満をかっていたこともあり<sup>15)</sup>、おそらく、モスクワでは、先の市当局、総監そして総督の間での長い検討が行なわれざるを得なかったと思われる。ようやく、1860年4月に、これが許可されている<sup>16)</sup>。

モスクワへは、ピロゴーフが彼のもとの日曜学校事業の進展に関する詳細な資料を送り込んでいた。<sup>17)</sup>

以上のような経過から、設立は遅れたが、その代わりにキーエフの先行活動を範としながら、財政や設立の手続き等、組織的基盤をもって、この運動を進めていくことが可能となった。6月12日に第1学校、6月19日に第2学校、6月26日に第3学校、7月3日に第4学校の開校というように、急速に成長してゆく<sup>18)</sup>。

ところでモスクワの日曜学校の報告書を作成しているモスクワ大学教授ティハヌラーボフはいかなる人物であったのか。イオノーヴァによれば、彼は、ラズノチーネツであり、民主主義的

な思想の人物であり、警察当局が1862年6月に判断を下したような「共産主義へと移行する社会主義」の宣伝を行うような人物ではないが、彼の日曜学校の活動は、ある何らかの反政府的内容を有していたとされ、さらに、彼にはゲルツェンとの交渉もあったとされている<sup>19)</sup>。

以上のようにモスクワでもキーエフと似た性格を持って生まれるが、モスクワでの第5番目の日曜学校の発生(7月17日)は以上の学校とは異った性格を有している。これは工場主の設立によるものであった。この学校の目的とは、「貧しい両親の子どもに、宗教・道徳の向上とともに、将来の彼らの任務に見合った教育の場を与えること、すなわち、ただ単に技能に関してだけでなく自分の仕事というものを心得ているそういう教養のある親方を育成すること<sup>20)</sup>」であった。この学校には他の工場で働く労働者、職人が殺到し、1861年1月にモスクワで最も多くの生徒数を抱える学校となった<sup>21)</sup>。

さらに、第6番目は、労働者65人が自らの工場主のもとに陳情し、これを受けて何人かの工場主が、これに寄附をそえて、設立を促すといった<sup>22)</sup>形で生まれて来たものであった。

これらの新しいイニシアティヴはしかし、この運動の本流とはならず、先の学生やティハヌラーポフが組織し活動していたモスクワ日曜学校協会<sup>23)</sup>の事業の末端にあった。

以上のキーエフに対するモスクワの差異に比られば、サンクトペテルブルグでの日曜学校発生のイニシアティヴは、それとは問題にならないほど複雑に絡み合っている。

サンクトペテルブルグでは、先に掲げた官吏シピリエーフスキーの女子日曜学校(1859年4月設立、公的な認可を受けるのは、1860年1月20日<sup>24)</sup>)を除けば、モスクワと同様4月以降になり、次々と設立が許可されていく。

4月10日に、陸軍アカデミー教授、ドラゴミーロフ(Дрогомиров, М.И., 1830～1905)が学区当局の援助のもとに、歩兵大隊銃剣教練場を利用して設立した<sup>25)</sup>のを始めとして、以下のように設立されていく。5月に、砲兵隊長の地位を有するフィロソフ(Философов, А.А.)と郡学校神の法教師、司祭グミリエーフスキー(Гумилевский, А.В.)が、ヴラディミール郡学校を利用して<sup>26)</sup>。6月12日に、サンクトペテルブルグ大学の学生達がアンドリエーフスキー郡学校を利用して<sup>27)</sup>。さらに7月末には、帝立アレクサンドロフスクリツェイの学生オリヒーン(Ольхин, С.А.)が、サムソニェーフスク郡学校を利用して<sup>28)</sup>。さらに遅れて、8月末に、キーエフからサンクトペテルブルグに移っていたパーヴロフが、ガルヴァーニ(流電気)中隊の兵舎を利用して<sup>29)</sup>。工場主たちによるものは、ようやく11月に至って設立されている<sup>30)</sup>。

ここサンクトペテルブルグでは、一見して明らかな通り、設立事業において軍部が大きな関わりを有している。1861年1月1日までに存在した23校のうち、少なくとも、7校は陸軍施設を利用したものであった。これは、単なる公的な施設ではなくこの利用の際には、ツァーリの直裁を必要とする政府にとってはかなりの緊張を要するものであった。政府がこのような重要な施設を提供し、上にみたように日曜学校設立の事業に関与することにはそれなりの理由があった。

クリミア戦争敗北の後、農奴解放の公布前後の状況と政府の動向を、当時の革命家(セルノソロヴィエヴィッチ(Серно-Соловьевич, Н. А., 1834～1866)、スレプツォフ(Слепцов, А.А., 1836～1906))は、次のように述べている。「政府自身さえ、かなり動揺しながらも、最後の最後には、読み書きの有益さを完全に表明した。……日曜学校が活躍し、私人には、読書会の設置が許され、新聞紙上では、連隊の読み書きの進展についての記事が報道され、さらにこれが特にうまく進んでいるところの軍事部門に政府上層が感謝状を出すといった記事が掲

載されていた<sup>31)</sup>。最後に、陛下は、休暇や解職のために兵役を免じられている兵士が、村落の学校で学ぶという提案に賛同している。このことは、全く明らかに政府に対して無教養が、彼らにとってもまたロシア全体にとっても、直接危機的なものであるということを確認させながら、政府が教育に対する以前の組織的な妨害とは永久に決別したことを示しているし、直接に彼らが関与するところ、つまり、戦争において、その戦争の仲間にこれを普及するため自ら積極的な策を講じたのである<sup>32)</sup>。ここで、彼らは、政府がいったいどのような意味で教育の普及を支持したかということの一つの本質を指摘していた。このような状況のなかで、1859年に注目すべき論文が公表されていた。この論文が、陸軍参謀の一人であり、陸軍アカデミーの教授をも兼任したドラゴミーロフの論文であった。

彼は、1859年にサルディニア（イタリア）が、オーストリアに対して、フランスと結んで独立戦争に勝利した際に、サルディニア軍に加わっていたが、この勝利の原因を教育の力にみてとった。彼は、「1859年オーストリアーイタリア・フランス戦争概要」という論文を書き、そこで、戦争における道徳的要素の決定的意義に注目し、兵士を機械的に訓練することなく、兵士に学ばせ、彼らを訓育することが必要であり、このことによって、彼らが、自らの任務を自覚的に遂行することができるようにすべきと訴えていた<sup>33)</sup>。彼が開いた日曜学校には少なからず兵士もいたが、彼は、そこの講師として将校を動員している<sup>34)</sup>。ただし、この学校の講師として、サンクトペテルブルグ大学の学生も加っていること<sup>35)</sup>も無視してはならない。

このような学校の発生のあり方は、先に述べたイニシアティブの多様性のうちにあって、一つの潮流とはななかったが、サンクトペテルブルグはもとより、他の地域へ拡大していく過程での本流とはなり得なかった。地域的拡大の過程では、むしろ、ヴラディミール学校のような形で設立されるのが一般的であった。

ヴラディミール郡学校に設立された日曜学校は、5月22日に開校式が行なわれたが、その際には、フィロソフは欠席していたが、サンクトペテルブルグ学区総監デリヤノフ（Делянов, И.Д. 1818~1897）の他、副総監コルニーロフ（Корнилов, И.П. 1811~?）さらに県学校管理官など、教育省関係者で占められ、司祭グリューフスキーが開校記念演説を行った。「国民教育を擁護し支援する高貴な方々よ。我々は……我がギリシア正教会と我がギリシャ正教国民の為の新らたなる機関に起源を与えるためにここに集まった。…（中略）…〔この事業のまさに根本となるのは、職人達の道徳的向上、彼らの宗教的および知的な教育であり、これらは、手つかずのままに放置されて来た……<sup>36)</sup>。』後に、普及していくこの学校にとって、このような学校の目的は、従来通りの、政府にとって、最も信頼できるものであったに違いない。しかも、この学校の講師には、この内容にふさわしい精神を有すと考えられた神学アカデミーの学生達が、採用されたのである<sup>37)</sup>。ただし、日曜学校運動自体において、司祭はこれも主力となっておらず、サンクトペテルブルグでの、このイニシアティブによる学校は、ヴラディミール学校を含めて、2校であった。これは、1862年6月の学校閉鎖の際に、教育大臣ゴロヴニン（Головнин, А.В. 1821~1886）が告白している<sup>38)</sup>。

それでは、サンクトペテルブルグでの日曜学校の普及の根底にあったものは何であったのか。それは、一方では、講師陣である高等教育施設の学生層であり、他方では、教科書や教授用品等の維持費用を担っていたところのサンクトペテルブルグ職人団参与会であった。

同参与会では、日曜学校設立に関しては、すでに、1858年には、同職人団参与会の書記官ストルビン（Стрлбин, П.П.）によって、職人日曜学校の設立案が作成され、その計画が練られ

て来た経過があった<sup>39)</sup>。この案をもとに、同市会においては、政府に向かって、プリガヴォール（請願）を決議していたがそのなかでは、職人の「あらゆる教養の欠除」、これが、「我が手工業の不満足な現状の、そして、その外国人への従属」<sup>40)</sup>の原因をなしているという現状認識が訴えられており、これが職人のための日曜学校設立の動機をなしていた。

同職人団は、1861年の1月までにサンクトペテルブルグに存在した23校のうちの8校の維持費用を任っていた<sup>41)</sup>。

とはいえ、これらの徒弟制を基礎とする身分団体に属する親方層、徒弟の所有主といった部分が、共通の認識をもって、この設立に関わったのではないということは、学校開設後の生徒の不規則な就学という現象に現われていた。1860年の7月に、先のドラゴミーロフらが開いた学校の講師は、これについて、生徒（徒弟）から聞いた話をもとに、次のように述べている。「多くの所有主は自分のところの少年徒弟が通学することをしばしば許可せず、警察当局には、そのための“特別証明書〔許可書一筆者〕”を要望している」、さらに「何人かの職人所有者は、彼らのところで徒弟の学習をしている少年に、休日毎に仕事をさせ、自ら学ぶ時間のためのあらゆる可能性を奪っている。」<sup>42)</sup> 8月に設立されたコロメンスコエ学校の生徒の不規則通学さらに日々出席者数の減少について、同学校の関係者は、「自分のところで、休日に労働者を働かせようとしている経営主の哀しむべき冷談さと貧欲さに最も主要な原因」があると述べていた<sup>43)</sup>。おそらく、すでに日曜学校設立計画が2年前から存在したにも拘らずこれが容易に軌道に乗らなかった経過は、職人団内での、これに反対する部分が少なくなかったことを示している。

さて、このような矛盾を持ちつつも、この職人団の開明派によって、サンクトペテルブルグの日曜学校の半数の財政的組織基盤が維持されるようになっていくが、これらの職人団立の、すなわち身分団立の学校に対し、もう一方で、私立の学校の組織基盤が、1860年の夏には形成される。これは、「私立無料日曜学校代表者会議」という名称で、内部に、経営委員会と教育委員会を有した。この会議の主任として、8月25日付でパーヴロフが選出されている<sup>44)</sup>。

以上に、キーエフ、モスクワ及びサンクトペテルブルグを中心に各地の日曜学校の発生状況をその担い手の階層を中心にみて来た。ここに各階層の日曜学校運動発生における位置を次のように要約することができる。

第一に、この学校の設立のイニシアティブにおける学生インテリゲンツィア層の基底的主導的役割と、これが公的な承認を受ける際の自由主義派の補完的役割、これが発生の第一の要因であった。第二に、官僚、僧侶を含む保守的勢力のイニシアティブも、それぞれ全く孤立的であるが、認めなければならないだろう。第三に、軍部の上層あるいは政府自身といってもよいのだが、首都サンクトペテルブルグでは、特殊なイニシアティブとして現われている。第四に、職人の身分団体は、その徒弟制という基盤のもとで、自らこの運動の主力とは成り得ないが、自らを転成させていこうとする志向が、この日曜学校に求められたということはひとつの新しい芽として確認しなければならない。同時に、工場主による日曜学校の開設が、実際にあったことは確かであるが、しかし、その数は極めてわずかであったし、この学校の「効用」には極めて懐疑的であり、その開設時期は、他に比らべ遅れをとっている。

ソ連邦の史学界では、第一の点を強調するあまり、第四の点を除けば、他の諸勢力のイニシアティブにほとんど触れていないが、これらは日曜学校の普及の過程にあつて無視できない存在であった。以下に日曜学校の展開をみていこう。

## 注

- 1) Я.В.Абрамов, “Первые воскресные школы в России,” 《Русская школа (в след. Р.Ш.)》, 1898, №9, стр. 31, 34, 36 ; 1898, №11, стр. 35.
- 2) Советская историческая энциклопедия (в след. СИЭ), том 10, столб., 714.
- 3) Н.И.Пирогов, Избранные педагогические сочинения, М., 1953, стр. 394-397.
- 4) 改革期の政府部内のリベラル層を結集したとされる (以下を見よ。Э, Д. Днепров, “《Морской сборник》 в общественном движении периода первой революционной ситуации в России,” Революционная ситуация в России в 1859~1861 гг., М., 1965, стр. 229~258) 雑誌『海事論集』に掲載された彼の論文, 「生活の諸問題」は, 特に自由主義世論を大いにわかつたことは周知のとおりである。
- 5) СИЭ, том 4, столб. 697-699 ; том 10, столб. 714.
- 6) Р.А. Таубин, “Революционная пропаганда в воскресных школах России в 1860-1862 годах,” 《Вопросы истории》, 1956, № 8, стр. 81.
- 7) Там же, стр. 83. 1862年6月になって, 内務省は, このロンドンで, パーヴロフがゲルトツェンから, 日曜学校を設立し革命宣伝の場としてこれを利用するよう吹聴されたのだと推定したが, これは誤りであるとされている (Я.Л.Пичкуренко, “К вопросу о роли воскресных школ в буржуазно-демократическом освободительном движении России в конце 50-х—начале 60-х годов XIX в.,” 《Советская педагогика》, 1954, № 5, стр. 97.)。
- 8) Таубин, укаа. статья, стр. 81.
- 9) パーヴロフは, 1862年3月に逮捕されるまで日曜学校普及活動を展開する (Г. Е. Журавковский, Из истории просвещения в дореволюционной России, Под ред. Э.Д.Днепров, М., 1978, стр. 151)。
- 10) Таубин, укаа. статья, стр. 82-83.
- 11) Там же, стр. 81 ; Пичкуренко, укаа. статья, стр. 97.
- 12) Таубин, укаа. статья, стр. 83.
- 13) Пичкуренко, укаа. статья, стр. 99.
- 14) 《Московские Ведомости》 от 6 июля 1860г.
- 15) И.Т.Дронов, “Первые воскресные школы в России,” 《Вопросы истории》, 1970, № 6, стр. 199.
- 16) 《Московские Ведомости》, там же.
- 17) Там же.
- 18) Там же.
- 19) Г.И.Ионова, “Воскресные школы в годы первой Революционной ситуации (1859-1861),” Исторические Записки, Том 57, 1956, стр. 205. また, Пичкуриээнコは, ティハヌラーボフが学生に向つて「学校 (日曜学校—筆者) での中庸と温和の精神」を説いたことの一事をもつて彼を自由主義者と見なしているがいささか乱暴である。(Пичкуренко, укаа. статья, стр. 104.)
- 20) 《Журнал министерства народного просвещения (в след. ЖМНП)》, 1861, № 3, стр. 151.
- 21) ЖМНП, 1861, № 1, стр. 6
- 22) 《Московские Ведомости》 от 17 августа 1860.
- 23) Очерки по истории школы и педагогической мысли народов СССР, вторая половина XIX, Ответ. ред. А. И. Пискунов, М., 1976, стр. 165.
- 24) Абрамов, укаа. статья, 《Р.Ш.》, 1898, № 10, стр. 22.
- 25) ЖМНП, 1860, № 8, стр. 50.
- 26) ЖМНП, 1860, № 6, стр. 137.
- 27) ЖМНП, 1860, № 7, стр. 8.
- 28) ЖМНП, 1860, № 8, стр. 53.
- 29) Абрамов, укаа. статья, стр. 28.
- 30) ЖМНП, 1861, № 1, стр. 2.
- 31) 例えば以下を見よ。《Московские Ведомости》, от 15 декабря 1860 ; от 13 января 1861 ; от 30 мая 1861.

- 32) М.Лемке, Очерки освободительного движения «шестидесятых годов». СПб., 1908, стр. 63-64. この改革期には、将校層や下級兵卒を含めた陸、海の両軍において、独自に教育制度改革が行なわれている。
- 33) СИЭ, Том 5, столб, 320-321.
- 34) Абрамов, указа. статья, стр. 23.
- 35) Там же.
- 36) ЖМНП, 1860, № 6, стр. 137-139.
- 37) Там же, стр. 138.
- 38) Лемке, указа. соч., стр. 416.
- 39) ЖМНП, 1860, № 8, стр. 50.
- 40) Пичкуренко, указа. статья, стр. 96.
- 41) ЖМНП, 1861, № 1, стр. 1-2 ; Абрамов, указа. статья, стр. 23.
- 42) ЖМНП, 1860, № 8, стр. 47.
- 43) Там же, 1860, № 9, стр. 87. このような事情は、モスクワでも同様であり、職人達の通学に対する経営主の妨害について、モスクワ学区総監が、この妨害を許容しないようにという主旨の警告を、同市警視総監に向かって書き送っていた（Там же, 1861, № 3, стр. 151）。また、キーエフ学区総監であったピロゴフも、1863年に、キーエフでの同様の状況について、日曜学校の発展に伴い、「職人所有主が自らの職人や徒弟〔の通学〕を阻止することができなくなって来ていた」ことの経過を回想している（Пирогов, указа. соч., стр. 3395）。
- 44) Пичкуренко, указа. статья, стр. 102.

## 第2節 日曜学校運動の展開

まず、運動の具体的展開を追うまえに、運動の全ロシア的動向について概観しておこう。

この日曜学校の数と地域的拡がりについてみると、すでにみたとおり、1859年末には5校程であったものが、1860年10月までで、30都市に68（男子校58，女子校10）校<sup>1)</sup>（1861年1月1日までに、34都市に76校<sup>2)</sup>）、そして、1862年6月には、シベリアを含む50の県に274（男子校243，女子校31）校<sup>3)</sup>へと成長した。この274校のうち、132校は、県庁所在都市（41都市）にあり、残りの数はそれ以外の地域で、1860年末から1861年初めにかけて発生して来た郡庁所在都市の日曜学校を中心として周辺地域に拡がって来たものであった<sup>4)</sup>。

しかし、このような量的及び地域的拡大の過程では、他方で、後に述べるように1861年の秋頃からの運動の中核的諸都市での停滞、もしくは、当時の言葉を用いるならば、「熱狂」の冷却といった傾向が現われ、それらの周辺都市の一部に同様の傾向がみられるようになる。

以上に述べた過程で、特に三大都市での運動の急成長は、その質、量ともに、1860年の後半から1861年の初頭にかけての時期にみられる。政府のこの運動への対応は、農奴解放直前という時期にもあって、この時期をはさんで顕著な変化をみせるのである。以下の運動の展開の検討においては、この時期に焦点をあて、この学校の教育やさらには運営の主要な担い手である講師層の役割、通学する生徒の階層の性格、さらに教育内容を含め、この運動が、当時のロシアにあって、どのような意味をもったかについて、考えてみる必要がある。

まず、日曜学校発生地であるキーエフからみていこう。ここでは、日曜学校は、既にみたとおり、1859年10月に2校が設立され、1860年12月に7校、1862年6月にキーエフ市7校とその周辺地域に10校<sup>5)</sup>へと量的な変化をみせている。

講師構成では、1860年12月の時点で、男子校5校のうち、3校はキーエフ大学の学生、1校は、キーエフ神学アカデミーの学生、1校はギムナジア教官、そして、女子校2校は、女子

ギムナジヤ教官であった<sup>6)</sup>。神の法の授業は、同市の郡学校神の法教師（司祭）と神学アカデミーの生徒が担当した。

キーエフの学校では、特に、パーヴロフが一時、管理者となった<sup>7)</sup> 第 2 番目の学校、「新設」日曜学校が、日曜学校関係者のあいだで名声を得て、教育省は、これを模範学校として、『教育省雑誌』にしばしば掲載（1860年の 4 月、9 月、10 月、12 月の各号、1861年の 7 月号）し、この学校の展開を追っている。

この学校の講師は、キーエフ大学の学生達と教官層であり<sup>8)</sup>、先に触れたキーエフでの日曜学校の発生のあり方からすれば、キーエフの日曜学校の典型として分析しなければならない。

この学校は、1859年10月25日に、生徒数34人で発足し、1860年3月頃までに、常時（毎日曜及び祝日）通学者は60人程に定着し、この頃には、教育のシステムもひとつの型をなしている。この3月までに同学校で学んだ生徒は148人であった。この148人に関して、身分、職業、年齢について示したのが、表1（①—③）である。

表一 新設日曜学校(キーエフ)の生徒の身分別、職業別、年齢別構成<sup>9)</sup>

① (身分)		② (職業)				③ (年齢別)	
農 民	72	指 物 師	35	製 本 所	7	8 - 14 歳	56
町 人	25	仕 立 屋	31	表 具 師	4	15 - 19 歳	63
兵 卒	25	鍛 冶 屋	10	金 装 飾 工	2	20 - 30 歳	29
国有地農民	20	靴 屋	6	ラ ン プ 商	3	計 148 (人)	
貴 族	5	彫 刻 師	9	毛 皮 商	2		
商 人	1	馬 車 製 造	3	給 仕	22	計 148 (人)	
計 148 (人)		無 職					
		計 148 (人)					

身分構成では、明らかなように、国民の下層身分が圧倒的である。がしかし、貴族、商人がこの学校で農民身分と同席していたことは注目すべき事柄である。これは、「ほとんどが町人身分と農民身分」で占めたキーエフの最初学校の場合でも同様であり、彼らとこの学校の生徒数101人のうち、貴族5人、商人5人、小地主(однодворец)5人が同席していたのである<sup>10)</sup>。このような学校はこれまでほとんど全く存在しなかったといつてよい。

ところで、この「新設」学校の農民身分の者とは、その職業別構成(表1—②)からもわかるように、農業を営む農民ではなく、農奴解放を直前に控えて、地主から、様々な手工場(親方)や商人に売却された者であった。<sup>11)</sup>つまり、地主達が、自分の土地を農奴に分与(実際には買取させたのだが)しなければなくなる農奴解放直前に、分与の対象者である農奴を売却していたのである。このような農奴と貴族や地主とが同じ学校にいたのである。ただ、後者の貴族、地主が、おそらく、世襲貴族や大地主といった部分でないことは容易に判断できる。むしろ、これらの貴族・地主は、それらの身分、階層のうちの没落しつつある部分であった。日曜学校におとずれた下層の身分も上層の身分も、社会の転換期にあつて、自らの活路を教育に求めたであろう。

年齢構成(表1—③)についてみると、日曜学校は一般に成人教育機関とみなされて来たが、「新設」学校では、8—14歳の少年層はけっして少なくないし、先に設立された学校の場合

合では、101人の生徒のうち、10-15歳の年令層の者が半数以上（53人）を占めていた<sup>12)</sup>。この後者の学校では、最年少の「仕事のまだ決まっていない子ども20人」が、つまりほぼ2割を占めていたのである<sup>13)</sup>。おそらく、表2-②の「無職」14人もこの部分と考えられる。

さて、これらの少年、未成年者、成人の職人（見習、徒弟層）に、キーエフの学生達は何をどのように教えていたのか。

この学校では、入学して来る生徒の読み書き能力の程度に応じて、3クラス（初級-「全くの文盲者」、中級-「ある程度文字が判読でき、いくらか読み方を心得ている者」、上級-「すらすらと読める者」<sup>14)</sup>）に分けて教育が行なわれた。毎日曜と祝日の午前10時から午後2時の間で、約60人の生徒が、3クラスに分かれ、1時間は3クラス共通でキーエフの郡学校神の法教師が担当する神の法、他の2時間は、初級クラスでは、読み書き、中級と上級のクラスでは、「読み方」、「書き方」、「算数」が教授された。講師の生徒に対する数は、初級クラスで、生徒12人に対し教官2人、上級クラスでは、20人～25人に対し7人であった。生徒の学習過程ではさらに細分され、中級クラスでは、2、3人の、そして、上級では、4～6人のグループを形成していた。これらの各級間は連続しており、各階梯の課程を終えた者が進級することになっていた<sup>15)</sup>。

以上のような1860年3月頃にはすでに形づくられていた教育システムは、基本的に変わらず維持されていく。しかし、生徒の成長の度合、入学者の増加と関連して、特に教育内容を発展させていく。

これまで述べて来た1860年3月から、8月、9月、11月を経て、翌年4月に至る学校の生徒数（出席者数）をみたのが、以下の表2である。

表-2 新設日曜学校の生徒数の変化（各月、期間の平均数）<sup>16)</sup>

時 期	初 級	中 級	上 級	計
1860年3月	12人	少なくとも 30人	20～25人	62～67人以上
1860年8月	(?)	(?)	(?)	50～70人
1860年9月	15人	40人	20人	65人
1860年11月	35人	65人		100人
1860年10月20日 } 1861年4月20日	65人 (最大 最小) (99人 35人)	45人 (最大 最小) (69人 27人)	13人 (最大 最小) (15人 9人)	123人 (最大 最小) (364人 87人)

この表にみるとおり、全生徒数は、9月頃までは50人から70人の間で変動して来た後、10月頃から特に初級に入学する「文盲者」が殺到し、冬から春にかけて、急速に増大し、9月以前と比らべ2倍程になり、一時、364人が押し寄せた日もあった。特に、初級への入学者の増大という事実は、この学校の教育が、文盲の職人達の人気を集めていたことを示すものである。

1860年の8月から9月にかけては、3月と比較して、各クラスの教育内容の向上が図られている。初級クラスでは、「読み書き」に加えて、「数の数え方」(100まで)が導入され、中級と上級のクラスは明確に区分されて、前者では、「物語りの読み方」、「四則計算」、「書き取り」が行なわれ、後者では、「地理」・「自然史」(「自然と人々」というテーマで)が導入されていた<sup>17)</sup>。

教育内容は、1860年冬から1861年の4月にかけてさらに進展し、初級クラスでは、中級への進学条件でみると、さらに「10までの四則計算」が加えられ、中級クラスでは、上級への進学条件でみると、「読解」、「四則計算」、「書き取り」へと若干の変化をみせ、上級クラスでは、「特にロシア語教育を重視」というように変化している<sup>18)</sup>。算数教育の前進と、読み書き教育の徹底という方向がここに見い出せる。しかし一方で、「地理」・「自然史」という科目が消えていることに注目しなければならない。後に詳しく述べるが、政府によって、これらの科目の教授が厳格に規制されたのである。しかし、この同じ頃の教科書、参考書のうちには、例えば、「ルキヤノフの旅行記」とか、「ラージンの旅行」といった地誌、地理と関わらざるを得ない読み本が含まれており<sup>19)</sup>、事実上は、これらの地理、地誌の話を交じえて、「ロシア語教育」がおこなわれたと考えられる。

神の法の授業は、以上の読み方、書き方、算数などの教科の終わった後、全クラス共通で行なわれていた<sup>20)</sup>。しかし、先に述べたように、「地理」・「自然史」という科目が学校の正式な教科目のうちから除かれた頃、この神の法の授業の不徹底が問題とされ、この科目のクラス別教授の必要性が叫ばれていた。

他の日曜学校と同様に、この学校でも毎週土曜日の夕方、学校の講師（学生）を中心に職員会議（педагогический совет）が開かれて来ていたが、1860年冬から1861年春にかけての会議（平均19人参加）において、最も主要な議題のひとつとしてとりあげられたものに、この問題があった。そこでは、神の法教師の側から、生徒の増大に伴って、一度に100人以上の生徒に対し、一人で神の法授業にたずさわることは困難であること、そして、同時に生徒達が、この授業より先に、彼らの知らなかった様々の知識を吸収しており、神の法の授業が徹底されない<sup>21)</sup>という事情が訴えられていた。結局、学生講師もこれを認め、神学アカデミーの学生が、神の法教師を援助するという形で、クラス別の授業が行なわれるようになった<sup>22)</sup>。

以上のように、キーエフの新設日曜学校の1860年春から1861年の春にかけての、教育内容の変化は、基本的な読み書き算の部分の教育水準を次第に高めながら、「地理」、「自然史」といったある程度の高い普通教育水準の科目を導入する方向で発展して来たところのみられる一方で、その発展は、政府の側からの規則や、ツァーリ専制の学校の一つの基本的要素である神の法教授の維持徹底といった抑制策の前に限界づけられていた。

しかし、注目すべきは、日曜学校がこの抑制策に限界づけられていた頃、「国民の貧困な階級の道徳的発展と学習のために」、2校の「平日学校」(ежедневные школы) が設立されて来たことである<sup>23)</sup>。これらはこの名が示す通り、平日学校の普及という背景のなかで生み出されて来たものであった。この平日学校での教科目は、「神の法、ロシア語、文法、世界史と祖国史、算数、地理」、そして「職人」には、特に「金属加工と木材加工の方法」（この他、「製図と画法」）というように、日曜学校では教育できない様々な教科目が組み込まれている<sup>24)</sup>。

ところで、このようにキーエフでの日曜学校運動における教育内容の発展には、キーエフの日曜学校講師一特に学生たちのそこでの積極的役割を確認することができる。キーエフでは、1860年の初めまでに使用されて来た教材、ゾロトフの教科用本や「国民読み方」といった書籍の不十分さが指摘され、キーエフの講師が、独自に教科用読本の作成を企図していた。この読本は、自然部門と歴史部門の2部門に分けられ、前者は、「自然とその諸力に関する一般的な理解を与える」ものであり、後者は、アブラモフによれば、「人間社会の成立と発展に関する」ものであった<sup>25)</sup>。おそらく、このような内容を有する読本は、かりにでき上がったとし

ても、政府の許可を受けて、教室で使うことができたかどうかは疑わしい。

しかし、読み書き教育を含めた一般教養の水準は、教室に限らず、キーエフの学校に附設された図書室を通して、学校以外でも生徒が読書することによっても保証された。先の新設日曜学校には、1861年6月までに、74種類の蔵書（3架に分けられ、生徒借出用、指導用、禁帯出<sup>26)</sup>）があり、キーエフ第一学校には、少なくとも、25種の蔵書があり、その種類は主として、旅行記を含めた地理、地誌、<sup>27)</sup>この他は、「英雄」伝記物を含む歴史、さらに寓話集や民話といったものであった。

さて、モスクワでは、日曜学校運動はどのように展開していたか。ここは、既に触れたように、日曜学校の創設あるいはその維持のあり方において、キーエフの影響を多分に有していた。1860年6月以降、その年の末に至るモスクワの日曜学校の状況を、モスクワの日曜学校運動の推進者、モスクワ大学教授ティハヌラーポフの報告書を中心に追ってみる。

まず、講師と生徒についてみると、1860年7月3日に第4学校が開設された時点で、4校の生徒総数267人（「登録者」＝希望者の総数で、321人）に対して、講師総数は、23人であったが、その3週間後には、全6校の生徒総数454人に対し、講師総数は、41人へと、生徒数、講師数ともに、短期間のうちに急速に増加していた。さらに、これが、1860年12月までに、学校数12校、生徒総数、少なくとも800人（登録者数、少なくとも2,000名）、そして、講師総数は、約100人へと、それぞれ、7月の時点に比らべ、2倍ほどに増大している。<sup>28)</sup>

講師についてさらにみると、キーエフと同様、学生（モスクワ大学学生）の占める比率は高い。この学生講師数は、7月では、全講師数（神の法教師4名を除く）19名のうち16名（7月3日）、また、34名（神の法教師7名を除く）のうち27名（7月24日）と、ほぼ8割以上を占めていた<sup>29)</sup>。1860年11月には、全講師数は70人に達していたが、神の法教師を除けば、依然として、「ほとんどが大学の学生とこの大学の課程を終えた者<sup>30)</sup>」であり、明らかにモスクワの日曜学校でも、学生の講師への参加、不参加は、学校の運命を左右する存立条件となっていた。

モスクワの日曜学校の生徒の身分構成については、詳細な資料はないが、やはり、主要な部分は、「徒弟や労働者」、「貧困な身分」、「手工業労働者」<sup>31)</sup>とかで呼ばれているところの都市に住む職人層であった。

モスクワの日曜学校のクラス編成、教育内容はいかなるものであったか。

モスクワの日曜学校では、入学者の読み書き能力の程度に応じて、2クラス（「文盲クラス」、「読み書きクラス」）に分けて教育がおこなわれた<sup>32)</sup>。毎日曜と祝日に、午前11時から、午後2時にかけて、各校6～8人の講師が、1校あたり平均約90人（最低数53人、最高125人—1860年7月24日）の生徒を相手に教授にあたっていた<sup>33)</sup>。キーエフの学生達が教授にあたった先の新設日曜学校（1860年3月から4月にかけての生徒数60人に対し、少なくとも9人の講師、11月の生徒数100人に対しては、約40人）に比らべれば、講師1人あたりの生徒数はかなり多い。

教育内容は、学校の発足時すなわち6月においては、キーエフと同様に、1時間は2クラス共通で、神の法の授業が行なわれ、他の2時間は、文盲クラスで、「読み方」と「書き方」そして読み書きクラスでは、「正確な読み方」、「書き方」と「算数」であった。さらに、読み書きクラスでは、希望者に「技術製図」が教授されていた<sup>34)</sup>。

しかし、7月に入るとすぐに、これらの科目の教授を基礎としながらも、教育内容にキーエフと同様の変化が現われて来た。ティハヌラーポフによれば、「いくつかの学校では、読み

書きのできる生徒（読み書きクラスでの生徒一筆者）に読み方を教えている教師が、彼らの授業に、自然史からの多くの事細かなものまで、つまり、この最新の学問に関わる学科を持ち込んでいる」、またさらに「その他の教師は、簡単な語り物のなかで、ほとんど文法にばかり注目し、その文法用語のために科目の実際上の面を放置している<sup>35)</sup>」ティハヌラーボフの言うこのような「自らの基本的な任務からの逸脱<sup>36)</sup>」はなぜ起こったのか。

「自然史」知識の教授が行なわれるようになったのは、ひとつには、キーエフからの影響が考えられる。「文法」教育については、このモスクワでの、第一学校設立の当初から、既に、市内の初等学校（都市教区学校や郡学校）の生徒までも魅きつけて来たこと<sup>37)</sup>と関連している。このことは日曜学校の生徒の側からの教育内容に対する要求の多様化をもたらした。これについてティハヌラーボフは、次のように述べている。「日曜学校の生徒の側からの様々の形の訴え、その中には、例えば、我が貧困な身分の家庭教育や公的な教育の欠除とそれらの必要性という根本的な訴えもある一が声高く叫ばれているが、これらの訴えが、時おり、講師を自分の基本的なプログラムから様々な側面へと傾かせることになっているのであろう。ある者は、ドイツ語やフランス語での読み書きを彼らに教えて欲しいという希望をもって現われている。彼らはギムナジアへ入学することを望んでいるが、彼らにはそこへの準備教育をする資金はなかった、また、他の者は養育院や他の教育施設へ入学するために、日曜学校に通って来ている、さらに他の者は、ラテン語修得に関する証明を手に入れようとしている<sup>38)</sup>」モスクワの日曜学校の生徒は、6月から7月にかけて急速に膨張していた（6月12日—156人、6月26日—257人、7月10日—278人、7月24日—454人）が、この中には日曜学校での初等教育を受けることを目的に通う者とともに、ティハヌラーボフが「貧困な多くの親たちが様々な中等や初等の教育施設への無料の準備教育を日曜学校に期待している<sup>39)</sup>」と述べるように上級階梯の学校教育を明確に志向している部分を含むようになり、日曜学校が質的に変化する可能性をもっていた。

このように、モスクワの日曜学校の発展には、キーエフのような学生達のイニシアティブによる「自然史」教育の普及の方向性をもちつつも、教育水準においてある程度高い部分の生徒を入学者のうちに含んでおり、彼らの要求が、「ドイツ語やフランス語」、「文法」からの知識を、日曜学校の教育内容に持ち込ませて来たのであった。

しかし、これらの「逸脱した」部分のうち「自然史」知識の学習は、8月には、停止されるようになった。1860年9月の教育省雑誌は、このことを次のように伝えている。「読み書きのできる階梯でクラス毎の読み方に採用され必要とされて来た方法（自然史やロシア語文法からの説明を伴う方法）は、自然の歴史と活動からの説明を停止することによって修正され、そして、教師の指導のもとに、クラス毎の読み方は、生徒が読んだことを正確に伝えることができるよう学ばせるという方向で、読み書きのできる生徒に読み方を教えることとなった<sup>40)</sup>」ここに明らかなように、「自然史」に関わる部分のみが、取り下げられている。その理由については、『教育省雑誌』は何も触れていない。この理由については以下のような事情が考えられる。1850年代後半以降の初等中等教育改革の準備がなされて来た過程で、教育省は、特に中等教育施設での自然科学に関わる部分の教育が生徒に「唯物論的な思考」を生む原因となっていないか<sup>41)</sup>と、絶えず懸念して来たことがあり、日曜学校が開設されて来た頃にもまだこの問題は解決していなかった。モスクワの学区総監からこの日曜学校の教育内容について、上の経過に鑑み、何らかの規制を受けたことが考えられる。

生徒の上級階梯の学校への志向は、1860年秋になってさらに強まって来ていた。新聞では、

モスクワの日曜学校では、日曜学校の教科の知識の水準をはるかに越える多くの生徒が常に存在すること、また以前と同様に、中等教育機関へ入学するために外国語を学ぶことを希望する者が他方で存在することを報じていた<sup>42)</sup>。このようななかで、8月以降モスクワ大学の学生たちの何人かは、これらの要求に、課外授業の形で対応して来たが、10月の初めには、これを日曜学校から完全に独立させ、「夜間クラス」として設立することを決めた。

この学校は、『教育省雑誌』によれば、「ギムナジアの第1学年、第2学年を目指して日曜学校の生徒から優秀なる者を選抜し準備教育をするという目的を有していた。」この学校は、1860年10月4日、モスクワ大学の教授であった自由主義派の巨匠グラノーフスキーの5周年を記念して、モスクワ大学を利用して開校された。この学校のクラス編成は、ギムナジアの各々第1学年と第2学年へと進む候補者を入学させる2クラス制をとっており、教科目は算数をその教育程度別に2つの段階に分けた他は、共通に、神の法、ロシア語、習字、地理、そして、ドイツ語とフランス語が教授された。教授時間は毎日、夕方、4時から6時までであった。この学校は、日曜学校の設立基準の定数の2倍の60人を開設の基準とした。最初に設立された学校ではこの年の11月1日には、67人の生徒がおり、うち32人は日曜学校から進級して来た職人達であり、残りの35人は郡学校にも籍を置く者達であり彼らは外国語のみの聴講を許された<sup>43)</sup>。

こうして、モスクワでも、キーエフと同様に日曜学校の発展を基礎としながら、その延長線上に（前者は、「夜間クラス」、後者は「平日学校」という名称で）、上級教育機関を生み出し、さらに、モスクワのそれは、大学へと継続するギムナジアへの橋渡しとして明確に位置づけられていた。

首都サンクトペテルブルグにおいての日曜学校運動の展開は、ツァーリ官僚たちの眼前に絶えずさらされているという点でも、また、新聞、雑誌を通してのロシア全土への影響の強さという点でも極めて重要である。さらに1862年の6月に、ここでの運動が後に運動全体が壊滅するに至る大きな要因を含んでいたという点でも、ここでの運動は特に注目しなければならない。

ここでの日曜学校運動を概観するなら、既にみたとおり、1850年代の末にその芽をもちつつも、なお決定的な歩みには至らなかつた段階から、1860年の春から夏にかけて、確実にその基礎を拡げ、1860年10月には12校、1861年1月には、23校、1862年6月には、28校へと量的な成長を遂げていた<sup>44)</sup>。これらの数にみるとおり、やはり、1860年から1861年に至る時期が、成長のピークであり、それ以後は、1年半にわずかに5校増えているに過ぎない。

以下に、1860年後半のここでの日曜学校運動の展開を、サンクトペテルブルグはもとより、他の地域での模範とされたいくつかの日曜学校を例にとって検討する。

1860年春から夏にかけて設立された4校（歩兵大隊銃剣教練場を利用してドラゴミーロフによって開設された学校（以下、ドラゴミーロフ学校とする）、サンクトペテルブルグ大学学生によって設立されたアンドリェーフ学校、フィロソーフォフと司祭によって設立されたヴラディミール学校、帝立アレクサンドロフスクリッツェイの学生によって設立されたサムソニェーフスク学校）は、ともに、それぞれ独自に、学校の内部組織や教育内容、クラス編成、講師の責務等を定めた内規（положение）をもっていた。他のサンクトペテルブルグの学校も、これらを模範として教育事業を進めている。これらの4校を中心に、以下、ここでの運動の展開をみていく。

## サンクトペテルブルグ4校の日曜学校の開設年月日、講師\*、生徒数

(\* 神の法教師を除く)

ドラゴミーロフ学校<sup>45)</sup>

開設	1860年4月10日			
講師	サンクトペテルブルグ大学学生、将校、文官			
生徒数	6月	7月後半	9月前半	11月後半
	約100人	約110人	約120人	約130人

アンドリエーフ学校<sup>46)</sup>

開設	1860年6月12日	
講師	サンクトペテルブルグ大学学生	
生徒数	6月12日	7月23日
	約150人	約127人

ヴラディミール学校<sup>47)</sup>

開設	1860年5月22日			
講師	神学アカデミー学生、他、農学校(中等教育機関)生徒			
生徒数	5月22日	6月19日	7月～9月前半	11月末
	25人	355人	約300～360人	(415人) 登録者

サムソニエーフスク学校<sup>48)</sup>

開設	1860年7月23日			
講師	軍外科医アカデミー学生の他将校			
生徒数	7月23日	8月21日	8月後半～9月前半	11月
	43人	119人	180人	180人

これらの4校について、講師の構成、生徒数の変化は上のおりである。アンドリエーフ学校の生徒については、8月以降の資料がなくその変化を確認することはできないが、サンクトペテルブルグでは、ヴラディミール学校が労働者や職人が密集して住む場所にあつて、特別に多くの生徒数を有している他、100人から200人の生徒が各校に殺到していた<sup>49)</sup>。

生徒については、身分構成についての詳細な資料がないが、キエフやモスクワと同様、職人、労働者が主要な部分であった。講師について述べるならば、先の4校の他、サムソニエーフスク学校に見られる軍外科医アカデミーの学生は、この他に、ヴヴェデンスク学校やセルギエーフスキー学校の講師のうちにも見い出せる<sup>50)</sup>他、ヴォズニエセンスク学校では、アレクサンドロフスクリッツェイのもと学生であった者達と2人の教育学者が講師であった<sup>51)</sup>。このように、サンクトペテルブルグでは、様々の高等教育機関の学生が、講師の主要な部分を占めた他、将校と農学校や神学セミナリア(これはすでに述べたロジェストヴェンスク学校の講師として、司祭によって動員された部分)の生徒が若干部分を占めたが、教育省の管轄の教員(例えば、ギムナジアや郡学校)が講師として参加していたことは認められない。

サンクトペテルブルグの日曜学校は、やはり、キーエフの日曜学校の先行経験を生かしながら<sup>52)</sup>、これが恒常的にそして強固な形で維持されるように各校に独自の内規を定めた。この内規は、もちろん政府の手によるものではなく、先に述べた主に高等教育施設の学生や将校たちの議論を経て作成されたものである。この意味で、内規は、日曜学校運動の綱領的な性格を有するものである。日曜学校の教育内容について触れる前に、学校の全貌を示すために、内規の一例として、典型的なアンドリエーフ学校の内規の全文を次頁に掲げよう。

アンドリューフ日曜学校内規<sup>53)</sup>

- (1) 学校での学習は、各日曜日と祝日に、2時から5時まで行なわれる。
- (2) 読み方、書き方、算数、説明読みおよび製図が教授される。

註（略）

- (3) 教授方法の選択は全く自由とする（ゾロートフ法を推薦する）。
- (4) 生徒はサークルに分けられる。文盲者は4人から6人の、そして、読み書きのできる者は8人から10人のサークルに分けられる（この数は、規準であり、決定的なものではない）。
- (5) 各サークルに講師1人が当たる。彼の不在の場合、他の講師が教授にあたる。また、生徒数の多い場合のために、ここに特別講師が指定される。彼らは通常、講師を補助し、彼の不在の場合の空席をうめる。
- (6) 生徒の各サークルへの配分は、生徒の知識の水準に応じて、行なわれる。
- (7) 強制的な措置も奨励的な措置も排除する。秩序が乱されるような場合には、注意が行なわれるが、個人的な注意であってはならない。
- (8) 講師には、望む者すべてが採用される。
- (9) 学校は参観者に開放し、彼らの意見は、これに関わる者に個人的に伝えられることなく、管理者に伝えられ、また、特別記帳に記入される。管理者の任務は、すべての講師が交代で行ない（各人が1休日を分担し）、この任務は、以下の通りである。1) 新たに入学する生徒を、彼らの知識に応じて、サークルに区分すること、2) 参観者に学校を案内すること、3) 統計資料の収集。
- (10) 学校の職員会議は、毎週土曜日夜6時より、アンドリューフ郡学校の施設において、召集される。会議の審議は、参観者にも公開で行なわれ、その意見は記帳に記載される。
- (11) 生徒の数、年齢、民族、信仰、身分および資格、また講師の数、資格に関する統計資料は、会議の最も重要な議事とともに、編集者との同意に基づき、『サントペテルヴルグ報知』と『教育報知』に掲載される。
- (12) 生徒には、彼らの両親や後見人に対する証明として、彼らの在学に関する証明書を毎週発行する。
- (13) 教える者の生徒への付き合い方は、いうまでもなく、丁寧にするのである。
- (14) 生徒数は、建物のいかによる。

このアンドリューフ学校の内規は、他の学校のものに比べ、比較的簡易なものであるが、クラス編成や内部組織や教育内容の規定、さらに、この学校の公開性の原則など、他の日曜学校と基本的に同じである。

いくつかの規定について、他の学校の内規との関連で補足しておこう。

第3条について、「教授方法の自由」は、最大限の教育効果を目的としていたが、ヴラディミール学校では、明確に目的を規定している。「いかなる方法も否定されない。が各科目の教授の際に考慮すべきことは、特に、それが知的発達を促すものであること、というのは、この知的発達は、人間に、自らが将来においてさらに学んでいく方向に向かう可能性を与えることにもなるからである。」（ヴラディミール学校内規第7条<sup>54)</sup>）と卒業後の労働者、職人の自己教育を展望している。また、サムソニェーフスク学校でも、読み方教育の方法について、「その本質において、丸暗記とか棒暗記とかいわれているものを排し、多かれ少かれ、説明によるもの」で、従って、「生徒を知的にしかも道徳的に発達させることのできる対話を伴うもので

なければならない」(サムソニエーフスク学校内規第7条<sup>55)</sup>)と、従来の初等教育機関での方法を批判しながら、生徒の知的道徳的発達を可能とする方法を模索していた。

第4, 5条のクラス編成, さらにサークル編成についていえば, ほぼ同様の人数でサークル形成を規定しているドラゴミーロフ学校の内規では, 次のように補足している。「初等教育の際には, 生徒と教師との間の道徳的な結びつきが重要である」ことを理由に, 先のような少人数生徒のサークルに対する担任制を採用した(ドラゴミーロフ学校内規第3条<sup>56)</sup>)としている。

第7条の規定は, 日曜学校の特徴ともいえる部分である。このアンドリェーフ学校の内規は, 生徒と講師の両方について述べたものであり, 生徒に対する処罰や就学の督促などの「強制」「奨励」を採用しないこととともに, 講師に対しては, 同様に処罰や教職に就くことの「強制」や「報酬」もあり得ないことが規定されたものと判断できる<sup>57)</sup>。学校の発生のあり方からして, 何らかの「強制」「義務」はあり得ないことは当然である。このアンドリェーフ学校とは異り, ヴラディミール学校の場合には, 生徒に対して, 就学奨励の措置を採用している。「職員会議は, 生徒への処罰はせずに, ささやかな褒賞をもって, 彼らの日常の勤勉さを過度に至らない程度で奨励する」と, 「褒賞」として書籍を与えることになっていた(内規第17条<sup>58)</sup>)。

ただし, 学校が定めた規則に反する者や「秩序を乱す者」については, 一定の措置を採用した。彼らに対する「注意」が「個人的」のものであってならないという規定は, 日曜学校に特有のものである。このアンドリェーフ学校の規定は, 特に生徒に対する「注意」について, 「個人」に対してではなしに「全体」に対して行うべきとして, その理由を次のように述べている。第一に, 「生徒の自尊心が傷つけられることなく, 自らを正していくようにするため」と, 第二に「個々の者の上に, 全体のコントロールをつくり出すため」と<sup>59)</sup>述べられている。これは, 講師についても同様で, 例えば, ヴラディミール学校の講師が規則に違反した場合, 「最初は全体に対する忠告で注意され, 個人に向けられてはならない, もしこれが効果のない場合, 全体の投票により, かかる人物は教授への参加を停止される」(内規第11条<sup>60)</sup>)。

講師の採用について, このアンドリェーフ学校は, 極めて開放的であるが, ドラゴミーロフ学校では, ここの講師による推薦制(内規第7条<sup>61)</sup>), ヴラディミール学校では, 「この社会的な福利のためにこの事業に身を捧げる者」であり, 「この好事業に参加するどのような人物も拒まれない」と条件があるが, いずれにせよ, 無報酬の講師の採用は, やはり容易ではなかったであろう。

参観者の学校授業や職員会議への参加の自由, 新聞や雑誌上への報告は, いずれの学校も, 半ば義務であり, 政府からの監視への配慮であった。しかし, 同時にこの公開性は, 各日曜学校間の学校の運営上, 教育上の情報交換にとって極めて重要であり, ヴラディミール学校の場合では, 学校の公開より一歩進んで, 講師に他の日曜学校の職員会議に参加することを義務づけていた(内規第10条<sup>62)</sup>)。このような日曜学校間の公開性の原則をもとにまた, 同じ高等教育機関の学生で各々違った日曜学校に通う講師間の交渉を基盤に, 1860年の8月には, パーヴロフを中心にして, 既に述べたように, 私人の学校の間の教育部門と経営部門を備えた組織的統一に成功するようになるのである。

講師の生徒に対する態度(第13条)についていえば, 各日曜学校は, 官制的な規程にはあり得ない講師の生徒に対する「道徳的義務」を, 定めている。ヴラディミール学校でも同様に,

「教授の際の必要条件は、生徒に対し、最も親しく、丁寧であることにあり、同時にまた、それ自体によって、生徒にお互いもそうであるよう教えなければならない」（内規16条<sup>69</sup>）と規定している。ドラゴミーロフ学校は、生徒に対する態度をさらに厳しく規定している。講師に必要とされる「道徳的義務」として、「自らの教える必要ではなく、生徒が知る必要に応ずることを考慮すること」、「生徒の知識の発展段階に応じて教授すること」、さらに絶えず学習の過程にある生徒の反応を注意深く観察し、生徒の「無関心」を「即生徒の力量不足のせいとせず、教授のまずさ」と判断すべきことなど、<sup>69</sup> あくまでも生徒の側に立つ観点で教授にあたるべきことが要求されていた。

最後に、内部組織、学校運営について述べておこう。日曜学校運営上の最高機関は、講師達が参加する職員会議であった。ここで、学校の運営、教育に関わる一切が決定された。一方、管理者には、何らかの強い権限はなく、アンドリェーフ学校内規第9条に示されているようなどちらかといえば、事務的な仕事であった。この他に、学校に図書室を備えている学校では、書籍の購入、受け入れの際のいわば図書選定者を講師のうちから選出していた。例えば、サムソニェーフスク学校では、3人の選定者がおり、まず、2人が学校に受け入れるすべての図書について事前に検査し、各図書の採用についての書評を提出し、両者の間に見解の不一致があった場合には、3人目の選定者の評価によって、受け入れが決定あるいは拒否されることになっていた（サムソニェーフスク学校内規第7条<sup>69</sup>）。

さて、教育内容の検討に移ろう。

アンドリェーフ学校では、先の内規に示した通り、神の法を除く、四科目を定めたが、しかし、神の法を除くことは許されなく、10月には、神の法教授が、行なわれている。その一方で、ここでは同じ頃、「説明読み」の科目を通して、「地理」、「自然史」、「技術」からの知識が教授されるようになっていく<sup>69</sup>。ヴラディミール学校では、7月には文盲者クラスで、「読み方」、「習字」、神の法、半文盲者クラスで、「算数」、「書き取り」、神の法、「製図」が教授されていた<sup>69</sup>が、9月までには、「補習科目」として次のような科目が付加されるに至っている。「(1)自然科学にもとづく話—生徒に自然の法則をある程度知らしめ、これによって、今なお庶民の間に深く根ざしているところの偏見から解放する、(2)地理、特に自然地理の最も初歩的な理解、(3)ロシア史からの話、及び、最後に、近代の歴史<sup>69</sup>」。ドラゴミーロフ学校では、内規によれば、神の法、「読み方」、「習字」、と「算数」の他に、「地理」と「製図」、さらに、授業の終わった後で、この軍部主導の学校の特徴であるが体操が教科目としてあった<sup>69</sup>。サムソニェーフスク学校では、「読み方」、「書き方」、「書き取り」、「説明読み」、「算術」と神の法といった「模範」的な教科目のみであった<sup>70</sup>。

これら4校の教科目の「模範」から越える部分に対しては、やはり、学区当局からの規制が行なわれている。例えば、ドラゴミーロフ学校では、7月中旬には、地理の科目は消えており、また、ヴラディミール学校の補習科目は、極めて、切り縮められた形となっていた、つまり、先の(3)のロシア史は完全に切り取られ、「自然地理、自然史からの知識」のみが「読み方」の科目のうちで教授されていた<sup>71</sup>であった。

ここサンクトペテルブルグでも、キーエフやモスクワと同様に、一部の学校で教育内容の発展があったが、しかし、これも同様に規制されていた。

以上4校の他に、特に宗教教育の強化の方向にあった学校もあった。神学セミナリア生徒の教育実習<sup>72</sup>の場ともなっていたロジェストヴェンスク学校では、神の法の授業の他に後の

初等国民学校の正教育科目となる教会スラブ語と、さらに、聖歌の導入が予定されていた。

この他に、工場主達によって開設された数少ない日曜学校（シリッセリブルグ学校）では、製図、作図といった科目の他にさらに、「生産技術法」、「手工」といった職業的教育科目の方向が強められていた<sup>73)</sup>。

サンクトペテルブルグでは、キーエフやモスクワのような、日曜学校の延長線上に発展した学校は生み出されなかった。が、ここでは、「夜間読書会」とか「国民読書会」とかいった名称での休日以外の不規則の講読会が、先に述べた、サンクトペテルブルグ私立日曜学校代表者会議の率先で、開催されるようになる<sup>74)</sup>ことは忘れてはならない。

#### 注

- 1) ЖМНП, 1860, № 10, стр. 55.
- 2) Лемке, укав. соч., стр. 407.
- 3) Там же, стр. 416.
- 4) Там же, стр. 405, 416.
- 5) Там же, стр. 416.
- 6) ЖМНП, 1860, № 12, стр. 130.
- 7) Дронов, укав. статья, стр. 199.
- 8) ЖМНП, 1860, № 12, стр. 131.
- 9) Там же, 1860, № 4, стр. 45.
- 10) Абрамов, укав. статья, (Р.Ш.), 1898, № 9, стр. 41.
- 11) ЖМНП, 1860, № 4, стр. 46.
- 12) Абрамов, там же.
- 13) Там же.
- 14) 当初は、「文盲クラス」と「非文盲クラス」の2クラス制であったが、学校の進展に伴って、前者がさらに2つに分けられたものである（ЖМНП, 1860, № 4, там же.）。
- 15) Там же, стр. 46~48.
- 16) ЖМНП, 1860, № 4, стр. 46 ; 1860, № 10, стр. 16 ; 1860, № 12, стр. 130 ; 1861, № 7, стр. 10-11.
- 17) ЖМНП, 1860, № 10, стр. 16.
- 18) Там же, 1861, № 7, стр. 10.
- 19) Там же, стр. 10, 11.
- 20) Там же, 1860, № 10, стр. 27.
- 21) Там же, 1861, № 7, стр. 11.
- 22) Там же.
- 23) Там же, 1861, № 1, стр. 7.
- 24) Там же.
- 25) Абрамов, укав. статья, стр. 44-45.
- 26) ЖМНП, 1861, № 7, стр. 11.
- 27) これらの蔵書の表題に出て来る地名は、アルジェリア、希望峯、シンガポール、ホンコン、日本などアジア、アフリカがほとんどであり、さらに「英雄」物としては、「イエルマークーシベリアの征服者—」、「アレクサンダー大王の一生と戦功」、「イヴァン・スサーニン（ツァーリのための死）」などであった。（Абрамов, укав. статья, стр. 45.）
- 28) 《Московские ведомости》, от 6 июля 1860 г. ; от 17 августа 1860 г..
- 29) Там же. 7月24日の41人のうち、学生を除く部分は、7名が神の法教師（司祭、司祭補）、3人はモスクワ大学入学志願者、2人は大学に所属していないが教員資格を有する者、残りの2人は、モスクワ大学聴講生と園芸学者であった。（Там же.）

- 30) ЖМНП, 1860, № 12, стр. 129.
- 31) 《Московские ведомости》 от 17 августа 1860 г., ЖМНП, 1861, № 3, стр. 151.
- 32) 《Московские ведомости》 от 6 июля 1860 г..
- 33) 《Московские ведомости》 от 17 августа 1860 г..
- 34) 《Московские ведомости》 от 6 июля 1860 г..
- 35) 《Московские ведомости》 от 17 августа 1860 г..
- 36) Там же.
- 37) 《Московские ведомости》 от 6 июля 1860 г..
- 38) 《Московские ведомости》 от 17 августа 1860 г..
- 39) Там же.
- 40) ЖМНП, 1860, № 9, стр. 97.
- 41) 例えば, 1857年の教育大臣ノロフ (Норов, А.С., 1795~1869) の上奏報告書 (ЖМНП, 1858, № 4, стр. 142) をみよ。
- 42) 《Московские ведомости》 от 16 декабря 1860 г., ЖМНП, 1861, № 1, стр. 6.
- 43) ЖМНП, 1861, № 1, стр. 6-7.
- 44) ЖМНП, 1860, № 11, стр. 55 ; 1861, № 1, стр. 1 ; Лемке указ. соч., стр. 416.
- 45) Абрамов, указ. статья, 《Р.Ш.》, 1898, № 10, стр. 23 ; ЖМНП, 1860, № 8, стр. 47 ; ЖМНП, 1860, № 10, стр. 15 ; ЖМНП, 1860, № 12, стр. 129.
- 46) Абрамов, там же, стр. 26 ; ЖМНП, 1860, № 8, стр. 47.
- 47) ЖМНП, 1860, № 6, стр. 137 ; № 7, стр. 7 ; № 8, стр. 47 ; № 10, стр. 15 ; № 12, стр. 124.
- 48) ЖМНП, 1860, № 8, стр. 53 ; № 9, стр. 87 ; № 10, стр. 15 ; № 12, стр. 129.
- 49) 4校の他の学校の生徒数は, 8月から9月前半にかけてのコロメンスコエ学校では約100人, 9月初めに開設されたヴォズニエセンスク学校では開設時に76人, 12月に170人, ガルバーニ中隊の宿舎を利用して開かれた学校では10月に150人, さらに11月に工場主によって設立されたシリッセリブルグ学校には12月から翌年にかけて300人が殺到している (ЖМНП, 1860, № 10, стр. 15 ; № 11, стр. 61-62 ; № 12, стр. 129 ; 1861, № 1, стр. 2.)。
- 50) ЖМНП, 1860, № 9, стр. 91.
- 51) Там же, 1860, № 10, стр. 15.
- 52) Дронов, указ. статья, стр. 200.
- 53) ЖМНП, 1860, № 7, стр. 8-9.
- 54) Там же, 1860, № 9, стр. 92.
- 55) Там же, стр. 88.
- 56) Абрамов, там же, стр. 24.
- 57) Драгоミーров学校内規第7条では, 教官の採用の際の条件として, 「強制もなく, あらゆる報酬もなく」と規定しており, ヴラディミール学校内規では, 各講師はサークル毎の生徒の出席, 欠席 (とその理由) について調べ, 名簿を作成するとしているが, その際に, 生徒に「どんな義務的なまた強制的な措置もとらない」と規定している (Абрамов, там же, стр. 25 ; ЖМНП, 1860, № 9, стр. 92.)。
- 58) ЖМНП, 1860, № 9, стр. 94.
- 59) ЖМНП, 1860, № 7, стр. 9.
- 60) ЖМНП, 1860, № 9, стр. 94.
- 61) Абрамов, там же.
- 62) ЖМНП, там же.
- 63) Там же.
- 64) Абрамов, там же.
- 65) ЖМНП, там же, стр. 88.
- 66) ЖМНП, 1860, № 11, стр. 63-64.

- 67) ЖМНП, 1860, № 8, стр. 47.  
 68) ЖМНП, 1860, № 9, стр. 93-94.  
 69) Абрамов, Там же, стр. 24-25.  
 70) ЖМНП, 1860, № 9, стр. 88.  
 71) ЖМНП, 1860, № 12, стр. 124-128.  
 72) この学校の目的は、一方で下層民に教育を普及することと併に、「将来、村落地域の司祭となる者に、国民教育の部門に実践的に慣れさせることを促す」ことが同時に存在した（ЖМНП, 1860, № 11, стр. 61）。  
 73) ЖМНП, 1861, № 1, стр. 2.  
 74) Пичкурено, укаа. статья, стр. 103.

## 第2章 日曜学校をめぐる政策の展開

### 第1節 政策の展開と運動の変質

以上に概観して来た日曜学校運動のその発生から1861年の初頭に至る展開は、未だ内務政策と未分化な初等教育政策にとって重要な意義を有していた。

1850年代末のロシアの近代化へ向けての農奴解放を中心とする一連のブルジョア的諸改革の準備過程にあつては、自由主義的外被を多分に有して、発生、展開したこの啓蒙運動は、自由主義世論はもとより、政府内の開明的な部分において許容される性格を有していた。

この運動は、しかし、その発生からしても明らかであるように、「下からの革命」を望む部分を内包して来たのであり、専制政府のその最も保守的な部分にあつては、この運動がそれをわずかでも露呈させれば即座にこれを弾圧すべき対象として考えられていた。

1861年の初頭に至るこの運動への政府の対応策として考えられたのはいうまでもなく、内務政策的な観点からであるが、それは一方では、労働者、職人への教育普及の意義を確認すべくロシアの「近代化」を展望し、これを許容するか、あるいは、1861年の2月の農奴解放を直前に控えて、農奴の「解放」令の際に起こり得る農民運動や革命運動に備えてこの学校運動を小さな芽のうちに摘み採るべきかの2つの選択枝があつた。この両極に、教育省と皇帝直属特別官房第三部（デカブリスト蜂起に直接触発されて1826年に創設されたツァーリ直属の最高警察権力）があつた。専層上層において、この両者の矛盾が現われ、その結果として、1861年に入って教育省の政策に変化が起こるがこれ以前の政府は、この運動にどのように対応して来たのか。

政府においてこの運動に対してまず、対策の指揮をとつたのは、内務省であつた。1859年末から1860年の春にかけて、キーエフやサンクトペテルブルグを中心に次第に姿を現わして来た日曜学校運動を内務省はどのように認識したか。このことは、1860年3月の内務相ランスコイ（Ланской, С.С., 1787~1862）の各県知事あての回章に現われている。この回章は、各都市における日曜学校の設立に関する報告と、この学校に対する今後の方策をどのように講ずるべきかについての見解とを要求したものであり、ここでは、内務省は、日曜学校運動を次のように認識している。「いくつかの都市で職人階級の間に読み書きを普及し、道徳性を発達させるために、職人や労働者のための日曜学校を設立することは有益であると確認されている」と、一般的にこの学校の職人、労働者の読み書きの普及と道徳性発達という目的について是認した後、この学校の設立の動きを警戒することを県知事に要求している。この際に、原則的に必要なこととして、次の点を要求している。第一に、学校が地方の学校当局（学区総監）の管轄下にあること、第二に、設立以

前に、県学校管理官のもとにその計画が提出されるべきこと、第三に、何よりもまず、教育や学習の部門に依じて、その学校の必要性が明白であり、それらの「一般的傾向が唯一の目的に向かっていること」が確認されること<sup>1)</sup>であった。

以上の内務省の資料収集と学校規則作成のための県知事の見解収集とこれに伴う内務省政策の原則の提示という経過措置を経て、内務省―県知事のルートでこの学校設立状況を9月頃まで監視を続ける一方<sup>2)</sup>で、政府は、急ぎ、教育省を通して、日曜学校の制度化を図ることになる。

ようやく2ヶ月後の5月に日曜学校に関する規則が作成されている。この規則では、この日曜学校を「国民への初歩的教育のため」と規定し、その教育程度に関して、「教育省の教区学校の学習の課程と同一の段階」としている<sup>3)</sup>。しかし、日曜学校の教科目には、教区学校の教科目にはない「図画」、「製図」の2つの科目が付け加えられており<sup>4)</sup>、これが、職人や労働者に適用されることが考慮されている。とはいえ、教育省では、この学校の対象となる生徒を「国民の」と規定していることは重要である。1828年法では、この教育の対象としての「国民」は何ら明示されていなかった。これは既に着手されていた初等学校改革案の反映であった。

日曜学校は、「身分(сословие)」団体と「私人」の希望により、設立され、同様に、維持は、「身分」団体のプリガヴォールに基づきそこから拠出される「公的資金」と設立者である「私人」の資金によって行なわれることとされた。他方で「これらの資金(の負担)はいかなる場合も教育官庁によるものであってはならない」と、補助さえも国庫から行なう考えのないこと明確に規定している。ただし、教育省管轄の建造物やその他の国有財産である建造物の利用を無料で提供することを定め、また、軍管轄の建造物については、特に、「皇帝陛下の同意」を得て利用させることを規定している<sup>5)</sup>。

これらは、この5月に至るまでの各地の日曜学校の現状を追認したものに過ぎない。しかし、この規程は、日曜学校のあり方に一つの規制を与えたことは確かであり、これ以降すでにみたとおり、例えば教科目の発展に対する各地方の学区当局の規制策の一つの基準として、効力を有したことは確かである。

これ以降、内務省は、この運動の展開を絶えず監視し、教育省はこれを後見する形で、ある程度で政府による奨励といった時期が続く。しかし、1860年末になって、1861年の農奴解放を直前に控え、政府は、特に皇帝直属の治安維持機関、第三部は、あらゆる下からの動きといったものに、警戒を強めていた。

第三部長官、ダルゴルーコフ(Долгоруков, В.А. 1804～1868)は、この運動の高揚を目のあたりにして、1860年12月18日にツァーリにあてた特別覚書きのなかで、この運動の規模について、予定されている農奴解放以上のスケールを要する問題として、次のように述べている。「日曜学校の突発的な発生は、この学校を普及させることが有益か否かがもはや問題となり得ない程の、熱狂的な運動となってしまった。それら(日曜学校―筆者)は、農民の解放の実施に比らべさらに一層広範に及ぶにちがいない<sup>6)</sup>。」この頃、「解放」が誘発する農民の暴動を既に予測し、政府はこの暴動の可能な限りの抑止と発生の際の弾圧のために、解放諸県の全土を網羅する教会権力と軍団の総動員計画を練っていた<sup>7)</sup>第三部において、日曜学校運動は、この時期には、すでに1857年以来4年の歳月を費して準備して来た当時のロシア社会変革の根本的問題が「平穩に」解決して行く際の何らかの阻害物となるかもしれないという危機感を生み出していた。

ダルゴルーコフは、この時点での日曜学校運動に関わる政治状況の認識を先の言葉に続けて次のように述べる。「政府は、国民の半分<sup>9)</sup>が自己の教育を国家に対する義務ではなくして、自分のためあるいはある何らかの個々の身分の私的な慈善であるとするを許すわけにはいかない。社会の中間層そしてこの層を見込んで動く自に見えない原動力が望むままに、この運動の先頭に立つこととなった。無料の教育が、彼らが善を尽くしたところの国民大衆の彼らに対する信頼や感謝の念を堅固な土台の上にゆるがぬものとしている<sup>9)</sup>。」専制は、この学校が、「国家」のためのものではない点、そしてそれ以上に、この運動を握っているのが、「社会の中間層」と「目に見えない原動力」である点に、逆にいえば、政府自身や、「思想穩健が疑い得ない高い身分」（ダルゴルーコフ）が、全くこれを統制し得ていない現状に危機を感じていたのである。このような認識は、この運動の発生において既にみたとおり、この運動の政治的本質をみてとったといつてよい。

では、これにいかに対処すべきか。ダルゴルーコフはいう。「学校の普及を妨害することは有害である、たぶんそれは可能だが」、この理由は、現在においては「口実のみを探し求めている者の不平や曲解を刺激するまさに導火線である」から。「妨害」せずして、どのように「有害な教説への傾斜のあらゆる可能性に機先を制する」か、それは、「政府がこの運動の先頭に立ち、怠惰でさまよえる人心の無意識の熱中を利用すること」であると<sup>10)</sup>。このために政府は積極的で緊急なる政策を練ることが必要であるとして次のような方策を提案している。あらゆる国民学校を「徐々に慎重に」国家機関としそれらの改善と急速な普及のための奨励の「観」を与えること；政府の「共感」を示すべく教会にこの目的で特別のサークル（司祭などで構成する）を設置すること、一ただしここに「成功」を期待する必要のないこと；学校の秩序を維持するために思想穩健なる高身分一すなわち貴族一をこの事業に参加させること；教育省の定めている教授プログラムを拡張しようとするあらゆる企てに対しては「慎重に、穏やかに」これを阻止すること、教育省はこれを規則ですでに規定しているが、「望む者がすべて講師となることを許されていることによって、規定されているところを賢明に遵守することは困難である」こと；国民用読み物を公刊する必要があること、その書籍の作成を「一部の者に」許してはならないことなどを提案している<sup>11)</sup>。

日曜学校のための軍施設の利用を自ら許可して来たツアーリではあったが、この覚書きをそこに「多くの真実が含まれている」ものとして、さらに「この事業が特に今のような人心の動揺のもとにあっては、極めて重要である」という認識をもって、この覚書きを教育大臣に送ること、そして、これに大臣の意見を付して大臣評議会に提出するよう命じた<sup>12)</sup>。

教育大臣コヴァレーフスキー（Ковалевский, Е.П. 1790～1886, 在任1858年3月～1861年6月）は、ダルゴルーコフの提案に対し、12月30日に各学区総監に向け、取り急ぎ、5月規則に対する補足、修正を行う回章を送る一方、翌年1月に、大臣評議会で先の提案のなかに現われた自分に対する批判をかわそうと、教育省の政策の弁護を、展開する。

12月30日の回章は以下のような内容であった。まず、「日曜学校は、今のところ設立には物質的に困難であり、その数において切迫した要求に対応しきれずにある教区学校の補助としてのみ役立つものでなければならない」と、5月規則に比らべ、「補助」として位置づけを明確に与え、運動に対してはすでにみたようなそれが要求した教育内容の向上を無視した。このような日曜学校の「使命」を、あるいは、「定められた事業の範囲の境界」を越えることのないように各学区総監に要求している。その「境界」とは、既に5月規則で規定された教科目に

限定されるという点で変わりはない。しかし一方で、その「境界」を越えている例として、キーエフの「歴史」、モスクワの「フランス語、ドイツ語」を挙げ、これを「日曜学校の設立者や管理者の熱心さのあまり」とこれまで容認した一時もありこれを弁護しながらも、その「逸脱」の規制に転じている<sup>13)</sup>。以上のように述べた後、回章は各総監に次の策を要求している。第一に、5月規則に規定されている教授プログラムにない科目の教授は決して許可しないこと、第二に、教科書、教授参考書等の教材は、教育省認可の、あるいは他の省において公認されたものに限ること、第三に、「学校の設立者および管理者が全くもって思想穩健なる人物であること」が確認されること、第四に、「学習の過程」を主として学区当局下の者に、「常に監視」させるべきこと、第五に、管理者や講師のうちに、規則にそぐわない行為、それ以上に「宗教真理に反し、国家の方向に反し、道徳の根本に反する傾向を有する行為」が見受けられる際に、かかる「危険思想を有する講師や管理者は猶予することなく免職させ、他の日曜学校での学習や管理に就くことを許さない」ことなどが要求されていた<sup>14)</sup>。

ここにみるとおり、コヴァレーフスキーはダルゴルーコフの提案から、一部を採用した。すなわち、管理者、設立者の政治思想性に関する検討、教育内容の統制、監視の強化であった。しかし、前者にしても後者にしても、規制の基準は、先の「逸脱」の例、キーエフやモスクワの例以外は、極めて不明確な形においてしか、つまり、反宗教、反国家、反道徳、等の「危険思想」という漠然とした形でしか規定できなかつた。

この回章が地方に届く頃、翌年の1月5日、コヴァレーフスキーは、大臣評議会でこの日曜学校に対する見解と、12月30日付回章を発するに至るまでの教育省の政策に関する弁護を行った。「日曜学校の設立は、突発的なものでもなければ一時的な現象でもない。世界のすべてに見られるように、それは、それ自身の土台も、そしてそれ自身の（設立の一筆者）理由をも有している」と、日曜学校がひとつの普遍的な性格を有しているものと判断し、現在のロシアにおいては、特にこの「土台」は政府によって予定されているところの諸改革にある、と改革と教育普及の関わりを強調した<sup>15)</sup>。

ところで、コヴァレーフスキーは、これまで、ピロゴーフやウシンスキーといった自由主義派教育学者を積極的に登用して来た政府内でも自由主義派の一翼を担って来た人物であった。西欧資本主義国の教育の状況を最も熟知していたのは、いうまでもなくウシンスキーであった。彼は、1860年3月コヴァレーフスキーに登用され、1861年6月にコヴァレーフスキーが更送されて間もなく、教育省のイデオロギー部門、『教育省雑誌』編集責任者の地位から追放される。ウシンスキーは、ピロゴーフに次いで、教育省内の日曜学校普及の際の指導的立場にあり、いわばこの学校のイデオログとして大きな役割を演じて来た。彼は、「日曜学校—地方への手紙」と題して、先の回章が出された翌月（1861年1月）の『教育省雑誌』上で、この学校の「道徳的意義」を公表した。日曜学校にいかに対処すべきか、ダルゴルーコフの政治的判断に触発され変化した政策に戸惑う「地方」に伝えて彼はいう。「日曜学校というものを何かおぼえずとした疑いの目をもってながめ、わが国にはまだ日曜学校の気運は熟していない……、などと考えているような人々」が存在している<sup>16)</sup> 状況があるが、しかし、この日曜学校には、極めて重要な「道徳的意義」があるとして、それについて、次のように述べる。

「日曜学校は、国民の墮落やどのようなよい結果をももちろん生み出しはしないプロレタリアートの衝動を予防するための活動的な手段の一つである、ということには少しの疑いもないでしょう。」「日曜学校のもう一つの重要な道徳的意義は、労働階級と教養ある人々を近づけ

ことにあります。これら二つの階級の間にはいたるところである種の敵対関係があります。(この両者の間に一引用者)率直で、心からの言葉が一語もかわされず、人間的で、融和的な意見が少しもかわされていないとしても驚くに足りないことです。……(中略)……粗末な木綿の長衣をまとい、素足で靴をはいた職人は、学校でフロックコートの主人に出合います。……(中略)……ここでは、彼は、教養ある人間の精神的卓越さを認めざるを得ず、なぜ彼が自分より上に立つかを理解するでしょう。学校における先生と生徒との間の誠意ある友好的な関係は、西ヨーロッパにおいてきわめて悲しむべき現象を引き起こしている経済的関係のよき解毒剤になります。……そうです、健全で、宗教や教育によって啓かれた国民の悟性は、国家の安寧、平和、力、富のもっともすぐれた保障になります。』<sup>17)</sup>ここに示された「意義」はもちろん、現実のロシアを直接反映しているものではない。むしろ、ロシアの資本主義化の方向に向かつての諸改革を経た将来におけるロシアのいわば西ヨーロッパ的状况を先取りしたものであった。後進資本主義国にとってこの日曜学校が、将来の階級対立の「融和」を使命として、国家の「安寧」「平和」を、その一方で、「教養ある階級」の「優越性」のもとに「力」「富」といったものを保障する温床と考えられた。しかし、このような考えは、政府内の支配的部分において、さらに、ロシアの緊迫した状況のなかではとるに足りないまさに少数意見であった。従って、かりにコヴァレーフスキーがこのような考えで日曜学校政策を進めることを主張したとしても、これは専制の容れるところとはならなかった。

しかし、ダルゴルーコフが明確に自分を批判していることに対して、コヴァレーフスキーは、弁護をこめて、反論している。「教育省が、日曜学校を局外の人々に、彼らの手に握らせてしまったという無策のために非難することができるのか。……あらゆる新事業がそうであるように、初めは多くの困難を伴う」ものであり、さらに、現在、国家に国民学校を維持する資金はない<sup>18)</sup>のだと付け加え、私人や地方の公的な資金による学校の設立を認めた。

そして、12月30日回章を發した経緯に関して、ダルゴルーコフに答えて、次のように結論づけた。「日曜学校がひとつの公益を目的とするようにするためには、実際には施行することが困難な複雑な規則が必要なのではなく、規則において定められている科目のみがそこで教授されるような、また、地方の学校の当局が市当局の協力を得て、その学校に管理者や講師を許可する際に細心な注意を払うような、簡単なそして一貫した監視が必要なのである。』<sup>19)</sup>

このようにして、コヴァレーフスキーはかろうじて、ダルゴルーコフからの攻撃をかわした。ツァーリは、12月30日の回章を是認し、次の三点を命じた。第一に、回章の写しを各県知事に伝達するよう内務大臣に渡すこと、第二に、各学区総監が回章を厳重に遵守することについて再確認すること、第三に、モスクワおよびサンクトペテルブルグの府主教に各日曜学校に直接神の法教授を行う司祭を任命し、ギリシア正教信仰や道德の根本に反するものを許さないよう監視させること、この件につき宗務院総長に伝達すること<sup>20)</sup>。このように、ツァーリの教育政策の主要な三ルートで、この日曜学校への監視の網をめぐらすこととなった。ただし、3本目のルートについていえば、農奴解放に伴う僧侶の動員のこともあり(彼らが、「解放」令を読み上げた)、全国にわたりこの任務を負わせることは困難であり、ロシアの政治文化の動向を決する拠点、両首都を固めるに止めざるを得なかった。

以上のような12月末からの日曜学校への監視体制の強化以降、日曜学校はどのような方向をたどるのか。

すでに述べた通り、この時期以降例えばキーエフでは、教区学校のプログラムにない教科

目、地理、自然史は、公然とその科目として教授されなくなったことは既に述べた。コヴァレーフスキーが指摘したモスクワの例、2つの外国語教育（ドイツ語、フランス語）の場は、しかし、すでに日曜学校そのものではなくなっていた。

サンクトペテルブルグでは、政府の命令に応じ、同学区全体における日曜学校を規制する目的で、地域的な日曜学校規則「サンクトペテルブルグ学区日曜学校規則<sup>21)</sup>」を定め、1月にこれを公布している。これは、その内容において、これまで適用されて来た5月規則に比らべて、変化している点は、開設者や管理者などの開設の際の事前のチェックの手続きを厳重にした点（第2条）、授業の時間と区分や講師に関する管理者の学区当局（県学校管理官、郡学校定員内視学官を通して）への報告義務、さらに生徒数の報告義務（以上第5条、第6条）を定めた点であった<sup>22)</sup>。

これに伴って、サンクトペテルブルグでは、従来の県学校管理官の他に、ギムナジア校長4人、定員内視学官3人とさらに、視学官補に、日曜学校の監視にあたるのが命ぜられた。以上のような措置は、モスクワでも採用された<sup>23)</sup>。

しかし、司祭をこの学校の教授過程の監視にあたらせるというツァーリの要求はほとんど実現できなかったことについてはすでに述べた通りである。

さて一方、日曜学校の普及は、以上のような政策の方向が変化する過程において、新しい特徴を有して来た。第一には、この日曜学校の地域的拡大であり、これに関連して、第二に、学校設立における地方の官僚（県知事や教育省下級官吏）や僧侶のイニシアティブが現われて来ること、第三に、日曜学校講師にギムナジア教員、神学セミナリア、郡学校教師さらには、各学校の上級学年の生徒が動員されていくこと<sup>24)</sup>、第四に、この日曜学校の生徒の構成における農民の比重の高まりがあることが主たる傾向である<sup>25)</sup>。

第一の点に関していえば、前節でみた三都市と、さらに帝国大学の存在するカザン、ハーリコフや、法学リッツェイの存在するヤロスラーヴリでの高等教育施設の学生層のイニシアティブによって、1860年末までに、各地の日曜学校開設普及への刺激が与えられて来た<sup>26)</sup>が、1861年へと年が変わる頃の開設のイニシアティブは、これらの層ではなくなって来る。このことはこれらの層のイニシアティブが、この運動においてひとつの限界に達して来たことを示すものである。他方で、県知事や教育省の地方当局が、先の政策の転換に伴って、この日曜学校事業に積極的な関わりを持たざるを得ない状況にもなっていた。この時期以降の日曜学校の開設に際し、ほとんどの場合、内務省地方官吏や教育省官吏の列席のもとで、司祭が学校開設のあいさつを述べるといった形が地方で定着するようになる。例えば、スターヴロポリ（1861年5月7日設立）の例では、自ら、設立計画を練ったカフカース総督、スターヴロポリ県知事の他、県貴族団長、市長らの出席のもとで、県主教が、学校開設の辞を述べている<sup>27)</sup>。このような形のみにかかわらず、日曜学校が、明確な政治的位置づけをもって、同様のイニシアティブによって設立されることが、特に農奴解放令公布後、現われて来る。

ポドリスク県知事は、農奴解放を「記念」して、1861年2月19日（実際の公布は3月5日）、首都カーメニエツに、日曜村落学校を設立し（2月19日に生徒数25人、3月4日に70人）、彼にあって最も信頼できる部分、「ギリシア正教信仰の」官吏と神学セミナリアの教員をこの学校の講師として採用させている。のみならず、ここの学校の生徒として、ギリシア正教徒とユダヤ教徒を、同席させ、先の講師は、盛んに、両者の不穏な対立を、ギリシア正教徒とユダヤ教徒とが互いに「平等」であるとの「訓戒」に<sup>28)</sup>によって被い隠そうと試みていた。

さて、以上に、1861年初頭以降の日曜学校運動の諸特徴を概観して来たが、その担い手における官制化の傾向及び生徒の構成の変化に伴う運動の変化<sup>29)</sup>とともに、地方への普及の過程で、サンクトペテルブルグでみたような日曜学校内規も、変化せざる得なかった。

1861年1月8日に開設されたヴァートカの日曜学校内規を例にとり、ここでの運動の継承と教育省の政策の影響はどのような形でこの内規に現われていたかをみよう。その前にこの学校の設立経過について述べておくと、1860年9月に、県学校管理官が地方新聞上で開設予定を報道し、県知事が市長を通して職人身分への伝達を図り、その後、県の報道官が、当市の40の職工施設を訪問して歩き、そこでの経営主や職人の対応を調査して回っている<sup>30)</sup>。こうして、1月に開設され、6月までの間に30回にわたる学校の授業が行なわれている。その間の登録生徒数は130名、これらの生徒は、9歳から36歳の、身分では農民と町人、職業では、職人や徒弟奉公に出されているものであった<sup>31)</sup>。学校の管理者には、学校視学官(教育省官吏)が成り、講師には、神の法教師一司祭(4人)、神学セミナリア高等科生徒(8人)、読み書きと算数講師(12人)―このなかには、カザン大学学生(2人)、ギムナジア生徒(4人)を含む―が採用された<sup>32)</sup>。

内規の第一条は、「日曜学校では、あらゆる年齢、身分、称号の人々が、特にどんな教育施設においても学んでいない職人および労働者の階級が教育される」と目的を定める。限定された教育内容―神の法、「ロシア語での読み方と書き方」、「算数」そして「製図」、「線引き」といった科目を詳細に規定しつつ(5条および32条から49条)、これら以外の科目を要求すると考えられる生徒を考慮して、「郡学校、教区学校の生徒や養育院の生徒の入学は禁じられないが、学校の登録名簿に含まない」特殊な部分として受け入れ、通常の生徒とは別に、クラス担任を受けもっていない「自由な教官の指導のもとで講義科目を勉強する」と明確に、キーエフ、モスクワの日曜学校発展の経験を生かしていた<sup>33)</sup>。

クラス編成や授業方法(11条、13条、32―49条)、また、授業公開の原則(参観の自由)(29条)、職員会議の定期的開催、決定手続き(21条～24条)等基本的に、サンクトペテルブルグでみた内規と変わりなくそれらを維持している。さらに、講師の「道徳的責務」を定めた条項も、「自らの教える必要でなく、生徒が知る必要に応じることを常に考慮すること」(第19条)とほとんど一字一句変わらない規定をしている<sup>34)</sup>。

しかし、この規定の意味内容は、一年経過した時点では、むしろ講師に対する拘束規定の性格を強くすることになりかねないものであった。講師の採用の際には、管理者(ここでは学校視学官)が、実質的に、強い権限をもつようになって来ていたし、管理者の任務のひとつとして、「学校秩序の維持」(第26条)が入って来ているなかで、上のような意味の変化は十分考えられる。このような官僚的な統制に対してはしかし、これを押し止める民主的な制度、職員会議決定の多数決制、管理者の選挙制(21条、25条)が維持されていることは注目すべきであろう<sup>35)</sup>。

この他、全体の職員会議において、「日曜学校に関わる政府の決定、地方学校当局と市長の指令」をまず講師に知らしめることが明示されている(24条)<sup>36)</sup>。

以上のように、日曜学校の内容を規定する内規にも、これまでのサンクトペテルブルグの内規を継承しつつも、いわば官制的なクサビといったものが、打ち込まれて来ていた。

## 注

- 1) Лемке, укав. соч., стр. 402.
- 2) Абрамов, укав. статья, 《Р.Ш.》, 1898, № 11, стр. 39.
- 3) これまでなお効力を有している1828年法(大学管下ギムナジア・諸学校法)によれば, この教区学校について, 目的において「最も下層の身分(сослояние)」への教育の普及を規定しており(第4条), この学校での教科目は, 神の法, 読み方, 習字, 及び四則計算の4科目を定めている(第15条)。(Хрестоматия по истории педагогики, под общей ред. С.А. Каменева, Том IV, Часть I, М., 1936, стр. 251, 252.)
- 4) Абрамов, укав. статья, стр. 43.
- 5) Там же, стр. 43, 44.
- 6) Лемке, укав. соч., стр. 403.
- 7) 菊池昌典著, ロシア農奴解放の研究, 1964年, 御茶の水書房, 394～403ページ。
- 8) おそらく農奴解放令(1861年2月14日令)によって解放される農民を想定していると思われる。もう半分は, 国有地農民と皇室領農民であり, 後二者の解放は遅れる。
- 9) Там же.
- 10) Там же, стр. 403-404.
- 11) Там же, стр. 404-405.
- 12) Там же, стр. 405.
- 13) Там же, стр. 405-406.
- 14) Там же, стр. 406 ; Абрамов, укав. статья, 《Р.Ш.》 1898, № 11, стр. 44-45.
- 15) Лемке, укав. соч., стр. 406.
- 16) Ушинский-教育学全集1(柴田義松, 菅原徹訳), 1965年, 明治図書, 140ページ。
- 17) 同上, 141～142ページ。
- 18) Лемке, укав. соч., стр. 407.
- 19) Там же.
- 20) Там же.
- 21) ЖМНП, 1861. № 1, стр. 3-5.
- 22) Там же.
- 23) Обзор деятельности министерства народного просвещения..., укав. соч., стр. 225.
- 24) 1860年の冬頃から開設されて来た9学校の年末から1861年初めにかけての講師構成は以下のとおり。

開設地	講師
グルホーフ(チェルニゴフ県)	郡学校教員, 同学校上級クラス生徒
トボリスク(トボリスク県)	ギムナジア上級クラス生徒, 神学セミナリア生徒, 県庁官吏 他
クロンシュタット(サンクトペテ ルブルグ県)	航海学校, 郡学校教員, 官吏, 海軍将校
オリョール(オリョール県)	ギムナジア6年, 7年生(県学校管理官=ギムナジア校長の監督のもと)
イルクーツク(イルクーツク県)	司祭, 教育省管轄教員, 地方官吏, ギムナジア生徒
ヤロスラーヴリ(ヤロスラーヴリ県)	司祭, 神学セミナリア生徒
ニエレフト(コスターロマ県)	司祭資格者(6) 郡学校教員(4), 神学セミナリア卒業生(2), 郡学校成績優秀生徒
カルーガ(カルーガ県)	ギムナジア生徒(3)
シンピールスク(シンピールスク県)	ギムナジア教員(4), 神学セミナリア教員(2), 郡学校教師(2), 地方官吏および市立病院医師(8), 他ギムナジア生徒

( )内は人数

(表は, 以下より作成。ЖМНП, 1861, № 1, стр. 8-14 ; 1861, № 2, стр. 73-78 ; 1861, № 3, стр. 152) なお, 1862年6月頃までの, ロシア全体の日曜学校の管理者や講師数, 2,318名のうち, 教育省に従事する(教師を含む)者が, 1,266名と過半数を占め, 一方大学学生は, 315名, 将校184名(Пичкуренко, укав. статья стр. 112)と全体の比重からすれば, 最終的に, 大学の学生層の比重は, 低くなっていた。しかし, 1861年秋頃からの学生講師の減少の結果としてこの数を考慮する必要はある。

- 25) 農奴解放に関連して、国有財産省の地方官吏が組織的な形で普及を旨とした例、リャザン県だけで一時的にせよ「農村成人のための」日曜学校は1861年3月に56校存在した、は特殊なケースとしても、ニエレフト(コストロマ県)では、日曜学校生徒64人のうち、農奴31人、国有地農民16人で7割以上を占めた他、ブスコフ県の日曜学校4校では生徒のほとんどは農民で占め、これらの他農民が町人とともに生徒のうちの主たる構成を占めると確認できるのは、オムスク、トボリスク、ヴァートカの日曜学校である。(Там же, 1861, № 5, стр. 85 ; 1861, № 2, стр. 77 ; 1861, № 1, стр. 10 ; стр. 11 ; 1861, № 9, стр.131)
- 26) カザンには、1861年初頭にいくつかの日曜学校が存在したがそのうち、カザン大学学生による学校、「大学日曜学校」が、最大の人気を集め(生徒数400人)、ハリコフでも、9月18日と9月20日に開かれた70人のハリコフ大学学生を中心とする講師構成(他に大学予科聴講生、ギムナジア生徒)の日曜学校も9月から翌年初めにかけて160人から340人へと大量の生徒数を擁するようになっていた(Там же, 1861, № 3, стр. 152 ; 1861, № 1, стр. 8-9, 12-13)。カザン大学の学生の活動は、特に活発で、周辺諸都市への日曜学校設立普及やあるいは講師となる目的で、カザン県内のチストーポリや遠くはヴァートカへも夏休みを利用して地方の活動に関与している(Там же, 1861, № 2, стр. 78 ; 1861, № 9, стр. 137)。さらに、ヤロスラーヴリでは、郡学校を利用して1860年9月18日に設立された学校では、当初教師であったギムナジア教官や官吏達が翌年にかけて日曜学校の講師から退ざいていき、結局同市のデミドーフ法学リッツェイの学生のみが講師として残るようになったが、学生の一人ドロタエーフスキーは、このことについて次のように憤慨して述べている。「他の教養ある市民はいったい何をしているのか」、「ヤロスラーヴリには、例えば高等教育施設で教育を受けた官吏やさらにはギムナジア教官がこんなにもたくさんいるではないか」。(Там же, 1861, № 11, стр. 98)これを新聞で読んで若干のギムナジア教師や官吏が、第2学校の講師として参加したが、後には、彼らのうちの少なくない部分が再び退ざっている。(Там же, стр. 99)
- 27) Там же, 1861, № 7, стр. 16. 他にヴォログダでも同様の形で日曜学校が開設されたことが伝えられている。(Там же, 1861, № 11, стр. 72)
- 28) Там же, № 9, стр. 119-120.
- 29) 農民身分構成の比重の増大についてはすでに述べた通りであるが、これが、多分に学校の生徒数の維持に不安定な要素をもたらした。例えば、下のヤロスラーヴリの日曜学校生徒数の変化を見よ。春(4月)、秋(8月-9月)の農繁期の減少が著しい。このような生徒の構成の変化に伴う生徒数の季節的な変化が、全体としての運動に不安定な要因をもたらしたことは十分推測できる。
- ※1860年ヤロスラーヴリ第2日曜学校生徒数の変化
- | 月/日 | 1/8 | 1/22 | 2/5 | 2/19 | 3/5 | 3/19 | 4/2 | 4/16 | 4/30 | 5/14 | 5/28 | 6/11-26  | 6/25 | 7/9 |
|-----|-----|------|-----|------|-----|------|-----|------|------|------|------|----------|------|-----|
| 生徒数 | 36  | 49   | 79  | 82   | 79  | 87   | 39  | 12   | 12   | 43   | 54   | 54-26-11 | 29   | 21  |
- ※表の出典は以下のとおり。ЖМНП, 1861, № 11, стр. 99.
- 30) Там же, 1861, № 9, стр. 130.
- 31) Там же, стр. 131.
- 32) Там же, стр. 137.
- 33) Там же, стр. 138, 139, 144-146.
- 34) Там же, стр. 140, 141, 144-146.
- 35) Там же, стр. 142, 143.
- 36) Там же, стр. 142.

## 第2節 日曜学校の閉鎖

1861年秋頃から、日曜学校運動にとって、極めて重要な事態が発生して来る。雑誌『ソヴレメンニク』, 1861年10月号で、ピオトゥローフスキーは、この事態を次のような言葉で表現している。「モスクワの日曜学校では、極端に講師が不足して来ている。これらの学校に通う生徒は減少して来た。こうして、熱にうかされた事業は、この出来事を冷めた目で見られるような状況になっており、ほとんどこの熱狂は消え失せてしまっている。ペテルブルグでも、ほとん

ど同様である<sup>1)</sup>」

この両都市にみられた「熱狂」の衰退は、他の諸県、例えば、オデッサ、アーストラハン、トヴェーリ、ヴィリナ、ペルミの諸県でも、次第に見られるようになる<sup>2)</sup>。

これらの諸都市での停滞の方向の一つの原因は、農奴解放令の発布以降つまり1861年の3月以降の政治の反動化の方向で、1850年代後半に生まれて来た学生組織の芽を摘む目的で出された1861年の7月21日規則に対する各大学の学生運動の高揚と関連している。エイモントーヴァによれば、特にこれに対し、秋（9月）には、ほとんど全帝国大学（サントペテルブルグ、モスクワ、キーエフをはじめハリコフ、カザンなど）で、学生騒動が発生し、何百という学生が逮捕された<sup>3)</sup>。この秋以降、日曜学校での教官の不足は、この学校での講師を学生が主たる部分として占めていたところで大きな打撃を与えた。サントペテルブルグでは、翌年の春にもこの「騒動」が引き続き、大学の閉鎖にまで及び、日曜学校のある部分では、この際の学生の大量検挙に伴い、学校講師の減少に一層拍車がかけられている<sup>4)</sup>。

1861年3月以降、1862年の6月に至るロシアの政治情況は、まさにひとつの革命情勢をなしていた。1861年3月以降の農奴の「解放」に対する農民蜂起の激昂（蜂起総件数1860年186件、1861年1,859件、1862年844件<sup>5)</sup>）、ポーランド革命運動の徴候、これらの状況のもとでの1861年末の革命的秘密結社「土地と自由」の結成、さらに先に述べた通り、学生運動の高揚などが政府を根底から揺さぶり始めた。1862年の春には、『陸軍論集』（4月－5月号）の編集方針がツァーリの恣意によって「新しい」方向に転換されるという事態に、106人の将校が抗議するというロシアで前代未聞の事件が起こっている<sup>6)</sup>。

このような事態は、体制側の最高責任者、内務大臣ヴァルーエフ(Валуев, П.А. 1814～1890)によって書かれた『ロシアの国内状態について』という手記に反映している。「政府は、今や誠心皇帝と祖国にその運命をゆだねているすべての者を深刻な混乱にまきこんだ孤立状態にある。領主階級、またはこの名で呼ばれる者達は、自己の真の利害を理解せず不満たらたであり、激しており、いくらか不敬であり、さまざまな潮流に分裂しており、現在の瞬間には、重要な支柱となるものではない。商人階級はといえば、政府の政策にほとんど口をさしはさみはしないけれど、信頼に値いせず、大衆にたいして、いささかなりとも有益な働きかけができる者達ではない。僧侶階級は、それ自体不秩序の要素をもっており、いかなる進歩も支持せず、反対派とか害を流す傾向のある者のみに対して影響力を保持しているにすぎない。農民はといえば、彼らは多かれ少なかれ独立した不穏な大衆を形成し、危険な幻想と、到底実現不可能な期待の影響にさらされている。最後に、国家によって支えられた社会秩序の主要な基礎である唯一の磁石（マグニット）、軍隊も動揺しはじめ、もはや絶対的に安全の保証となるものではない<sup>7)</sup>」と。

この手記は6月に書かれたとされているが、このような政府の四面楚歌の状況に至る過程において、政府の強い危機感を生むに至った最大の契機は、5月26日のツァーリ政府のひざまとサントペテルブルグで発生した大火であった。これは、当時近習学校の曹長の任にあっていたクロポトキン(Кропоткин, П.А., 1842～1921)にいわせれば、「アレクサンドル二世の政策の転機となったばかりでなく、一九世紀の半ばのロシア史の転機ともなった<sup>8)</sup>」事件であった。このクロポトキンの言葉は、自分の転機を表現する文脈のなかに位置づいているもので、若干誇張のきらいはあるが、しかし、実際に政府は革命運動の弾圧の徹底に動き出したことは確かであった。後に反動的評論家として活躍するカトコフ(Катков, М.Н., 1818～1887)

はこの日のうちにこれをポーランド人やロシアの革命党員の仕業と決めつけこれを宣伝し、政府や新聞も、「ニヒリストや学生」によるものと決めつけ、このようななかで、政府は、一挙に革命運動の弾圧にのり出した<sup>9)</sup>。サンクトペテルブルグ市には戒厳令が布かれ、これを機に、連日のように大量の逮捕が行なわれ、翌月（6月）には、革命運動の言論の拠点、『ソヴレメンニク』と『ロシアの言葉』は、8ヶ月間の発行停止を命ぜられ、また、結社「土地と自由」の指導的活動家の大半が逮捕される<sup>10)</sup>。さらに、7月にはチェルヌイシェフスキーも逮捕される。

このようななかで、政府はついに、サンクトペテルブルグの日曜学校のうちに革命運動に関わる部分があり、この学校で革命宣伝が行なわれている、という小さな事実を発見した。

1862年5月30日、ヴァルーエフは、過去に日曜学校が革命派に利用されることを予言した第三部長官ダグブルーコフに宛てた文書のなかでこの事実を次のように伝えた。「ヴィボルク側の日曜学校では次のような主張を聴講者に吹き込んでいる。神はいない。人間は永遠なる魂などもってはいない。皇帝は概して、そして我が皇族は、特に、無用である。人頭税の処理はこれを支払う者が負うものである。財産は共有でなければならない<sup>11)</sup>。」

さらに2日後、工場労働者の証言によって明らかとなったこととして、皇帝に次のような報告を行っている。「サムソニェーフスク（ヴィボルク側一筆者）とヴヴェデンスク（ペテルブルグ側にある）の2つの日曜学校で、宗教信心を動揺させるような、そして、所有権に関する社会主義的見解を普及するような、さらに、政府に対して暴動を起こさせるような傾向のある説が教授されている<sup>12)</sup>」と。

ツァーリは、これに即座に対応し、次の諸点を命じた。第一に、「これらの学校の管理者と教官の行動力そこで教授された学習の特徴について正式に取調べること」、第二に、「内務省、法務省、第三部及びサンクトペテルブルグ県総督の各代表から成る特別委員会に教育省代表を加え、この委員会に取調べさせること」、第三に、「取調べの終了に際してこの事柄は内務大臣の最終的判断に委ねられること」、第四に、「取調べの開始に際し2校を閉鎖しこれらの閉鎖の理由について諸新聞で説明すること」、第五に、「他の日曜学校の監視が実際に行なわれ継続して行なわれるための策を講じること」、そして、第六に、「予定されている取調べに応じて、日曜学校の根本的な改造に向かって起こり得る必要性に関する全般的な問題を検討すること<sup>13)</sup>」を命じている。ここに明らかなように、日曜学校はすでにほとんど教育省の手にはなく、内務政策の総責任者ヴァルーエフ内相の手にその運命は握られていた。この時期の教育大臣は、すでに1861年12月から任務についていたゴローヴニンではあったが、このことを6月1日に知らされてから後、彼は、日曜学校の閉鎖に至るまで、この学校を擁護することは何ひとつできなかった。一年半前に、第三部からの攻撃をかううじて交した教育省ではあったが、すでに政治情勢は、そのときは全く違っていた。彼は、サンクトペテルブルグの学区総監、デリヤーノフの弁護と自らの擁護に進み出て、そこで、不十分な監視体制は僧侶の側からの関与がほとんど2校（ヴラディミール学校とロジェストヴェンスク学校）のみであったと責任転嫁をしようとしただけであった。しかし、これは、ツァーリの厳しい叱責をかった。「このことは全部わかっている、が、それが、どれほど行なわれたか、も同様に知っている。それでは何のために最も注意深い監視というものが必要なのか<sup>14)</sup>」と。

先のツァーリの命令で、第二点目に設置が要求された取調べ委員会は、6月3日に発足し、3週間後の6月25日に、内務大臣名の報告書を作成する。この委員会の議長には内務省の代表ジダーノフ（Жданов, С.Р.）が任命された<sup>15)</sup>。

この委員会の調査をもとに、サンクトペテルブルグ市内の日曜学校が取調べを受けたが、結局、先の2校以外には、ヴァルーエフがこの2校に見つけた反宗教、社会主義的所有、反政府暴動を吹き込むような学校は見つけ出すことはなかった<sup>16</sup>。結局、サムソニエーフスク学校の学生講師2名（軍外科医アカデミー学生、卒業生）と将校講師1名そしてヴヴェデンスク学校の学生講師（同アカデミー）1名、計4名（内1人は精神錯乱の状態のため逮捕は延期された）の講師と、これらの学校の生徒であった町人や農民身分の工場労働者5名（内1人は6月9日に牢獄で死亡）が、6月中に逮捕されている<sup>17</sup>。

政府を何よりも驚かせたのは、将校講師の存在であった。それ以上に、労働者の供述のなかに、先の4名の講師間の連絡のみならず、そこにはさらに他の将校や軍人たちが彼らの家を訪問しているという事実であった<sup>18</sup>。専制の「唯一のマグニット」は、動揺している。サンクトペテルブルグはもとより、他の地域でも、軍の施設を利用して日曜学校が開かれ、そこで将校が講師となっているのである。

社会に向かっては、すでに6月2日には、2つの学校の閉鎖とその理由が述べられたのに続き、6月9日には、政府機関紙『北方通信』上で、ツァーリは、軍を通して設立されて来た日曜学校の閉鎖と軍の管轄に属さない者のためのあらゆる学校の閉鎖さらに今後軍に属する建物でのあらゆる局外者の集いの全面禁止を命令した<sup>19</sup>。この理由は次のように述べられている。日曜学校に対する「監視のために規定されているあらゆる規則の存在にも拘らず、それらのいくつかのところで、国民に読み書きを普及するというもっともらしい口実で、悪らつなる輩がこれらの学校で有害なる説、暴動を起こす考え、所有権に関する誤った理解、さらに無信仰を普めようと企んでいる。」日曜学校をめぐる状況について説明された後「皇帝陛下は、日曜無償学校が多く軍部門に付属して同様に設立されていること、及び、それらを監視することは困難なため、これらの学校でも、悪らつなる輩が有害で誤った説を導入することがあり得ること、さらに、下級官吏〔先の将校のこと一筆者〕も任務や誓約の事柄に背いて、犯罪的な企みに傾倒しているということに鑑み<sup>20</sup>」と述べられている。ここに述べられている後半の部分、特に、監視が極めて困難であることと何らかの危険な事態が「あり得ること」からすれば、もうすでに、これらの軍施設を利用している日曜学校だけに限らず、他の日曜学校の閉鎖は必至であった。

6月10日、勅令「日曜学校規則の再検討及び現存するこの種のあらゆる学校の臨時閉鎖について」が公布される。特殊な初等教育機関ではあるが、初等学校の閉鎖はこの後にも先にもこの一度限りのものであった。

この勅令の前文では、「日曜学校と国民読書会（Народные читальни）のために定められた監視は不十分であることが示された<sup>21</sup>」との書き出しで、これに続け先の政府機関紙で公表された状況説明を繰り返し、さらに次のことを付け加えた。国民読書会について「これらの機関を、有益なる知識の普及ではなしに、社会主義の教義の普及のために利用しようとする企図が明らかにされている。<sup>22</sup>」ここで注目すべきは、「所有権に関わる誤った見解」＝（「財産の共有」－ヴァルーエフ）といった自由主義者の最も嫌悪すべきところに加えて、「社会主義の教義の普及」を挙げている点である。この日曜学校の閉鎖に、彼らは、最終的に共鳴せざるを得なくなっている。こうして、第一に、「日曜学校設置に関する規則の再検討に遅れることなく着手する」こと、第二に、「今後新たな基礎となる前述の学校の改革に至るまで、現在存在するあらゆる日曜学校と読書会を閉鎖する」ことが命じられた。

ところで、先のサムソニエフスクと ヴヴェデンスクの学校で逮捕された講師すべてが、日曜学校で政府が摘発したような意味での教育を行っていたのであろうか。これ自体を検討することは極めて難しい。というのは、このツァーリ政府は、ツァーリ専制のもとで、行政、司法、立法のあらゆる権限を握っているからである。にもかかわらず、先の将校<sup>23)</sup>を除く3人の犯罪者(講師)についての罪状を記した1863年1月29日の元老院決定では、「学校で、暴動を呼びかけた」ことを確認できたのは1人だけであった。さらに、この決定が国家評議会において最終審議された翌日には、この1人についても「学校で暴動を呼びかけた」という部分は除かれていた<sup>24)</sup>。

以上の経過が示すとおり、日曜学校に対する革命運動の影響の調査も始まったばかりの6月1日から10日間程の間に、閉鎖は2校から、軍施設を利用した部分へさらに全学校(274校)へと及んだ。政府は革命運動のどんな小さな芽も踏みつぶすべく、より簡単な方法でこれに対処した。

## 注

- 1) И. Пиотровский, "О направлении школ грамотности," 《Современник》, Том 89 (1861, № 9, октябрь), стр. 2.
- 2) Там же ; ЖМНП, 1861, № 11, стр. 73 ; 1861, № 12, стр. 135 ; 1862, № 4, стр. 34.
- 3) Р.Г. Эймонтова, "Университетская реформа 1863 г.," 《Исторические записки》, 1861, Том 70, стр. 164-165.
- 4) ЖМНП, 1862, № 4, стр. 30.
- 5) Крестьянское движение в России в 1857-мае 1861 г.г., М., 1963, стр. 736 ; Крестьянское движение в России в 1861-1869 г.г., М., 1964, стр. 800.
- 6) Таубин, указ. статья, стр. 87.
- 7) 菊池前掲書, 446~447ページ。
- 8) 「ある革命家の手記」(上), Р.クロボトキン著, 高杉一郎訳, 岩波書店, 1979年, 211ページ。
- 9) 同上, 212ページ ; 金子幸彦他編著チエルヌイシェフスキーの生涯と思想, 社会思想社, 1981年, 22ページ。
- 10) 金子他編, 同上, 22-23ページ。
- 11) Пичкуренко, указ. статья, стр. 108.
- 12) Лемке, указ. соч., стр. 409 ; Там же, стр. 109.
- 13) Лемке, там же.
- 14) Там же, стр. 416.
- 15) Пичкуренко, указ. статья, стр. 109.
- 16) Лемке, указ. соч., стр. 431.
- 17) Пичкуренко, там же, стр. 113 ; Лемке, там же, стр. 433, 435.
- 18) Лемке, там же, стр. 408, 410-411.
- 19) Там же, стр. 423.
- 20) Там же.
- 21) ЖМНП, 1862, № 6, стр. 243.
- 22) Там же, стр. 244.
- 23) 将校の場合は、特別扱いで、1862年6月以降、ペテロ・パウロ要塞に、拘留されたままであった。(Лемке, указ. соч., стр. 424)
- 24) Там же, стр. 434-435, 436. ソ連邦の歴史学界では、各地のかなり多くの日曜学校で、革命宣伝が実際に行なわれたというように理解されているがこのことは再吟味する必要があるだろう。というのも、その根拠となっているのは、サンクトペテルブルグのこの2校だけであるからである。しかも、この2校の吟味も行なわれていない。革命勢力が、この学校の組織化に関わっていたのは、確かであるが、そのことがただちに革命宣伝と結びつく理由にはならない。

### 結びにかえて

農奴制のもとで強固な重いくびきに拘束され続けて来たロシアは、新しい社会へと向って転身しようとしていた。このなかにあつてクロポトキンが述べるように、「ロシアのいたるところで、人々は教育のことを話題にした。……民衆の無知、これまで向学心に富んだ者の道をはばんできたかすかすの障害、地方における学校の不足、時代おくれの教授法、そしてこれらの欠陥に対する救済策などが、教養のある人々の間や新聞のうえだけでなく、貴族のサロンでさえも好んで論じられるようになった。<sup>1)</sup>」このような状況は1856年のパリ講和条約（ロシアのクリミア戦争敗戦処理）後、厳重な検閲が若干緩和された頃から1861年に至る時期のことであった。いわゆる社会・教育運動の現出である。

1859年末に現われた日曜学校運動は短期間のうちにロシアのほとんどの大都市を巻き込んだ。地方に住む農奴は別としても、この運動はだれの目にも明らかとなった。

この学校は、それまでに存在した都市の初等教育機関とは全く異った性格のものであった。教師は無報酬で献身的に、自らの知識を下層の人民に分けあたえることがまるで自己の任務であるかのように、日曜学校に通う生徒の教育にあたった。しかも、彼らの中にはロシアで最高の知識水準を有する帝国大学の学生たちが少なくなかった。生徒の方は、都市の下層住民（町人や地方からやって来た農奴の子弟など）で、彼らは授業料が無償の学校に、自らの将来を託して、知識の吸収を望んだ。やがて生徒のうちには、ギムナジアへの途を閉ざされている従来からの初等教育機関の若干裕福な下層身分の生徒が入り込むようになり、彼らを含みながら、日曜学校運動は、ギムナジアを通して帝国大学へと向かう志向をみせており、このことは、教育省が作成して来た改革のプラン（1860年法案）を真っ向うから批判することを意味した。1860年法案は「読み書き学校」、「下級国民学校」といった、日曜学校の教育程度に対応する初等学校と、ギムナジアとの間の連続について、全く顧慮していなかった。

さらに、これまでの「国立」の初等学校に対する批判を暗に含みながら、従来の狭い教育内容からの脱出（自然科学の導入による古い中世的な世界観からの脱皮や広大なロシアや世界に対する視野の拡大）を目ざし、それと伴に、生徒の「知的道徳的発達」を促すための、教授方法の自由な選択、さらには、学校の民主的な運営のあり方を社会に提示した。

政府の初等教育政策全体のなかで、教育省の位置は低く、この日曜学校閉鎖に至る経過がこれをよく示している。が、1864年の初等国民学校規程を作成していく過程では、基本的に、この省が今後の初等教育政策の展望をもった規程案を練る位置にあつたことはいうまでもない。教育省は、この日曜学校運動にどのように対応したか。

よく知られているように、教育省は、1860年の春から夏にかけ、社会の意見を吸収すべく、1860年法案を、雑誌や新聞で、公表している。この法案の前文では、初等及び中等の国立の教育機関の行き詰まりを個々に述べた後で、ロシアでは、「学校と社会の間の強い精神的結合を欠いている。……後者は、多かれ少かれ政府によって維持されている教育施設に無関心であり、教育施設の重要性に共鳴することなく、また、教育施設のための時も財もむだにしている<sup>2)</sup>」と、社会を非難した。この法案で特に注目しなければならないことは、予定した3種の初等教育機関<sup>3)</sup>のうちの、「国民の下層身分の間に読み書きを普及する」（第7条）「読み書き学校」を、これまでの地方の学校当局やその上部機関の教育省やその他の省庁の官僚的なくびきから解放し、これを最大限普及することを考慮したことであった。第8条、第11条によれば、この

学校を設立する「私人」、「都市諸団体」「村団」は、その設立、廃止に関してどこに対しても決定をあおぐ必要はなく、これを最寄りの学校当局に伝えるだけでよいとした<sup>4)</sup>。教育省は、財政的な観点からこれを重視したことはもちろんであるが、政府の側からでなく、「私人」や「団体」（身分団体や自治団体）が自ら学校を設立維持することを期待していたのである。この意味で、日曜学校設立普及のあり方は、まさに、教育省にとって意を得たものであった。教育省が、政府内の保守派から攻撃を受けた際に、新たな事業が起こる時には常に様々な困難を伴うものであるという点で、日曜学校を擁護しようとしたのはこのためであった。1864年初等国民学校規程の前文においても、教育省は、依然として、「私的教育の自由」<sup>5)</sup>とかいうような形で、学校設立普及のあり方に関する基本的な考え方を変えることはなかった。

さらに、教育省は、学制改革の過程にあつて、「西欧」を熟知している人材を少なからず登用しており、労働者、職人の学校という点で、例えばウシンスキーのように将来を展望し、日曜学校を初等教育政策のうちに積極的に位置づける必要性も感じていた。日曜学校が閉鎖された時点で、自由主義者はほとんど全く口を閉ざしたままであったが、かろうじて、日曜学校の創始者の一人として社会に名声を得たピロゴーフだけは、直接には自らを弁護するために口を開いた。1863年4月、すでにポーランドの反乱がこの年の初めに発生していたが、彼は、キーエフの日曜学校がこのポーランドの宗教（カトリック教）や革命思想のロシアへの流入に対する防波堤の役割を有していたと自らを弁護しながら<sup>6)</sup>、この学校の再生を提案して、「虚偽の教説の普及を押し止めることは、ただそれに敵対する他のものを普及することによってのみ可能である<sup>7)</sup>」と日曜学校閉鎖の経緯から考え得る根本的な解決の道を主張した。「もしかりに泥水を通す水路を閉ざしたとしても、これではまだ、汚れた泉が涸渇するわけではない。その水路で、清流の源泉に向かって新しい水を流す方が適切ではないであろうか。<sup>8)</sup>」ピロゴーフは、この「新しい水」が何であるかを、他の自由主義者と同様に、専制政府に向つて、はっきりと述べることはできなかつたし、かりにできたとしても、すでに専制の受け入れるところとはならなかつた。

ロシア専制の初等教育政策は、既に1860年代初頭に、「社会主義」を経験した。初等学校を通してこの「教説」が流布する危険性を見出したのである。専制の中枢部にあつては、この時期以降、初等教育政策においても、この思想の流布に、絶えず対応を迫られることになる。日曜学校がその「一時的」な閉鎖を経験した後、1864年の初等国民学校規程に組み込まれそれに基づいて「再生」して来たこの学校は以前のような「熱狂」を呼び起こすこともなく（1874年までにその数はわずかに26校<sup>9)</sup>）、政府の監視体制のもとで、1862年6月のような事件も再び起こることはなかつた。しかし、1870年代には、今度は、都市の労働者や職人の啓蒙ではなしに、農村の農民の啓蒙という舞台を変えた、初等教育政策をめぐる同様の問題が生まれて来る。2度目の経験が、専制の初等教育政策をどのように変化させたか、これは、今後の課題としたい。

#### 注

- 1) クロポトキン前掲書、117ページ。
- 2) 《Московские ведомости》 от 16-го июля 1860 г..
- 3) 1860年法案では、初等教育機関として、下級のものから順に、「読み書き学校」、「下級国民学校」、「上級国民学校」の3種が設定されていた。
- 4) Там же.
- 5) 教育相グローヴニンの言葉である（ЖМНП, 1864, № 7, стр. 45.）。

- 6) Пирогов, укав. соч., стр. 395.
- 7) Там же, стр. 399.
- 8) Там же.
- 9) Ответ. ред. Пискунов, укав. соч., стр. 168.